

特36

館籍書會育教本日大

室 第

892

冊 號 架 函
一 一 一 五五

類

020055-000-2

特36-892

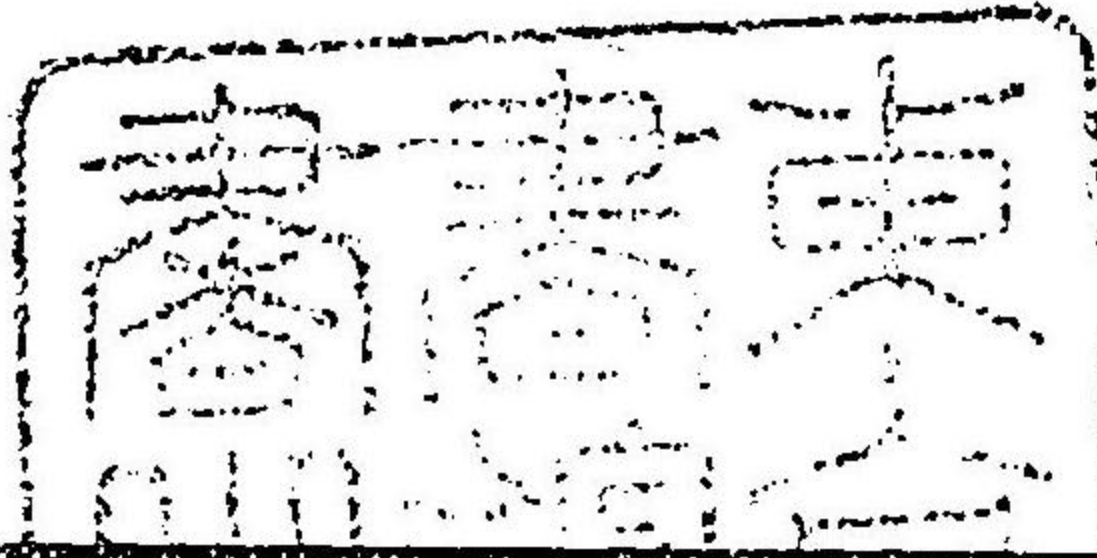
繪圖一代御人聖蓮日

宇喜多 小十郎 / 編

M13.7

ABH-0255





特36
892

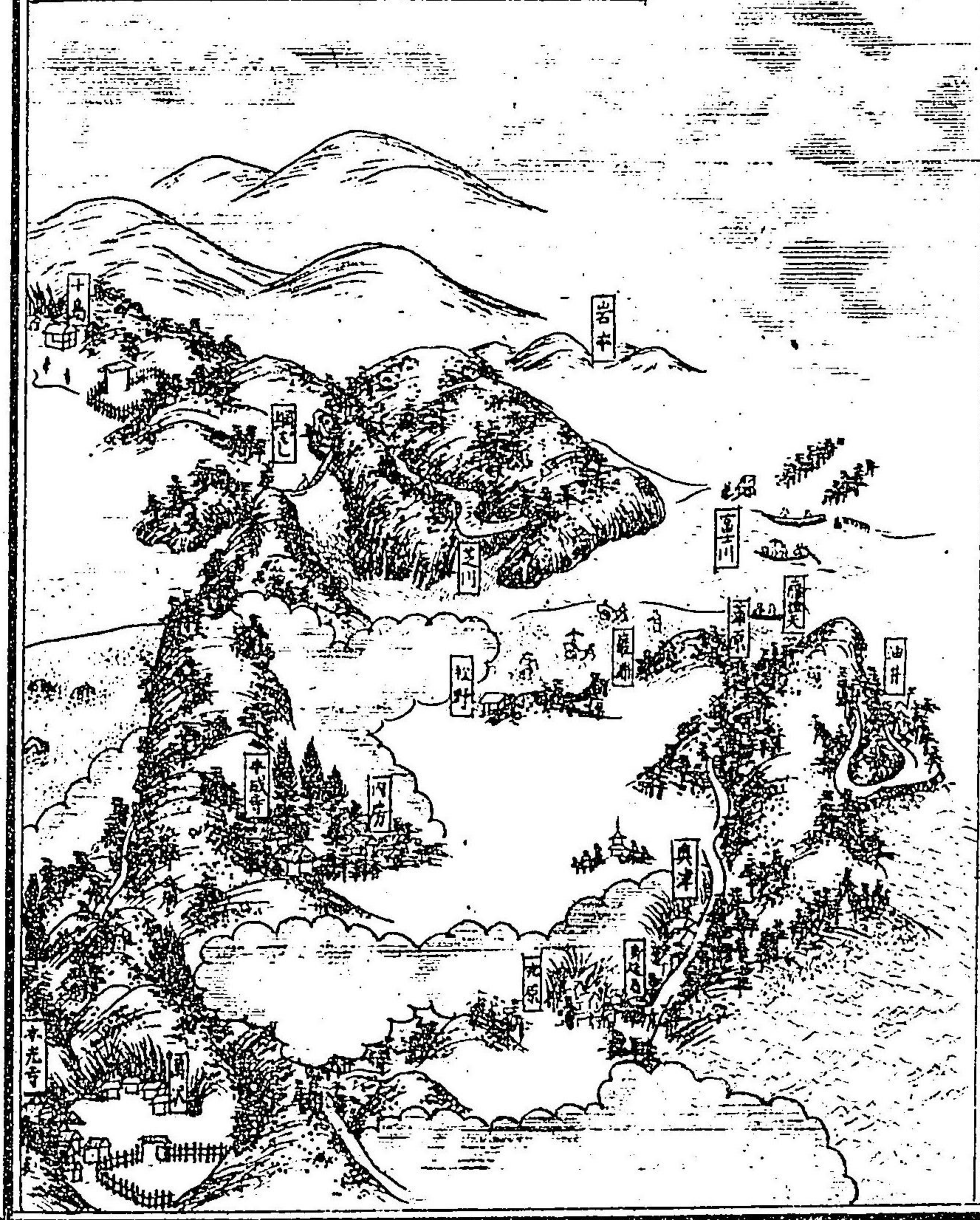
御深筆

舊村雲宮御深筆

日蓮大菩薩



法華宗
總本山
甲斐國



身延山
久遠寺
之略圖



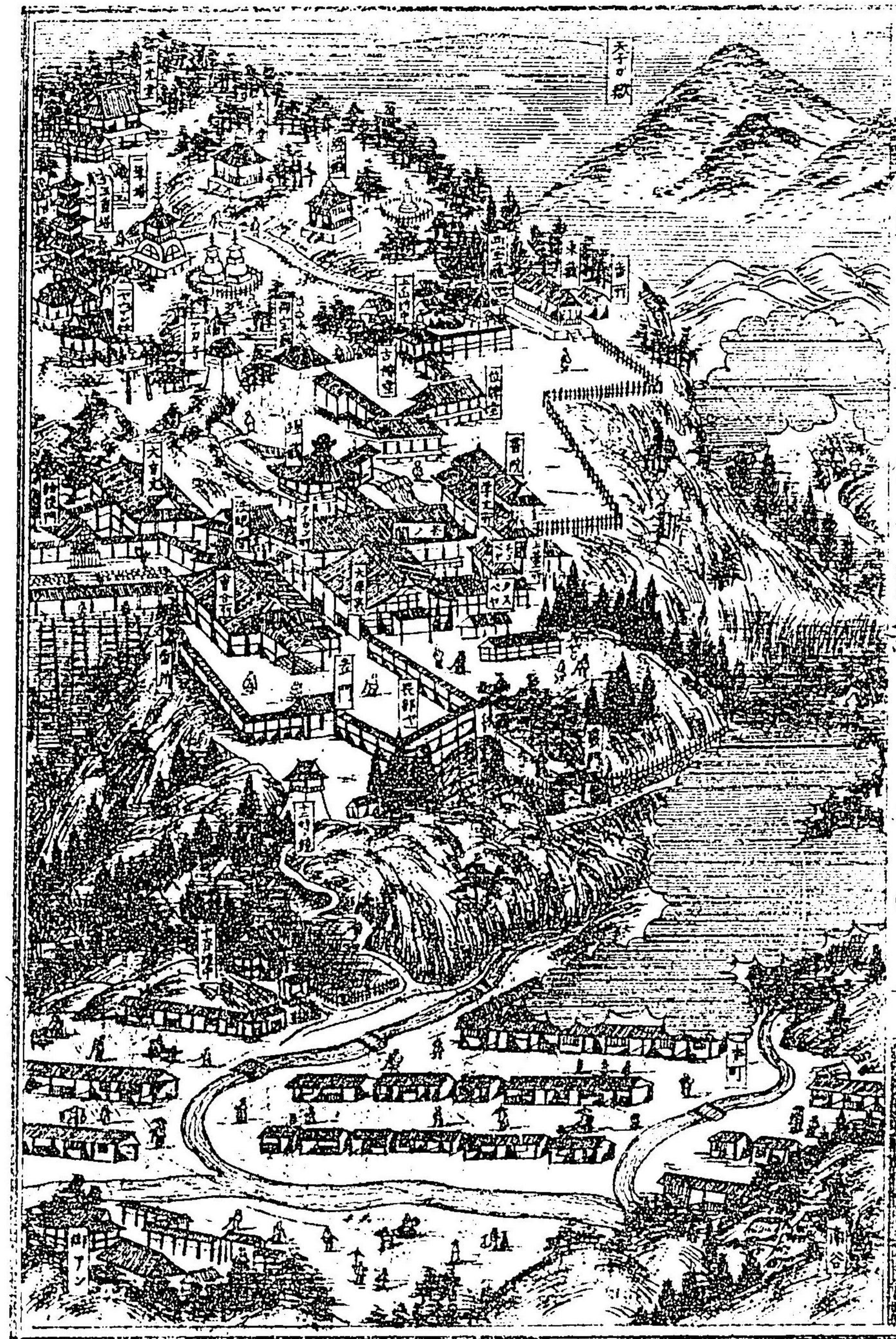
其一



其二

御書白道一仙詩圖繪

（口）



頭馬口第一代記圖繪

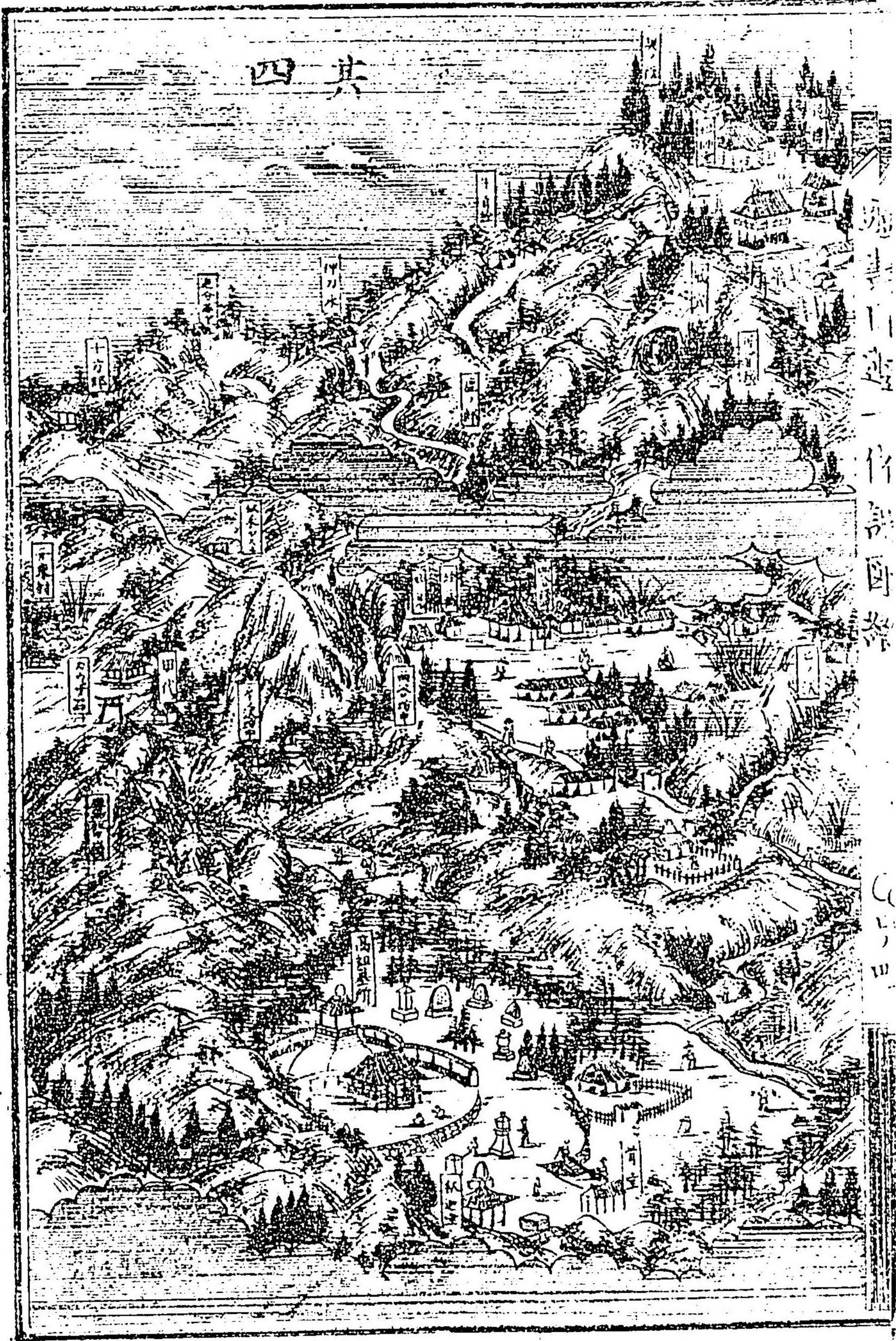
〇口五



其四

頭馬口第一代記圖繪

〇口五





頭書部

總目録

- 珠数の事 一丁
- 袈裟の事 一丁
- 衣の事 一丁
- 高祖紋所縁由事 一丁
- 法華宗總本山 一丁
- 同四箇大本山 一丁

頭書部 日蓮聖人御一代記圖繪

總目録

- 甲州身延山總繪圖 一ノ五丁
- 武州池上本門寺の圖 一ノ五丁
- 高祖大菩薩御系圖御影 一ノ五丁
- 井伊谷八幡宮御手洗井の圖 一ノ五丁
- 高祖御誕生の事 同圖 一丁
- 同安房國清澄寺の事 二丁

各府縣下本山

- △山城之部 四丁
- △尾張之部 一丁
- △駿河之部 一丁
- △甲斐之部 一丁
- △相模之部 一丁
- △武藏之部 一丁
- △安房之部 一丁
- △上総之部 一丁

同御出家の事

- 同眞言の業を受給ふ事 三丁
- 同諸宗の学を究んとす事 一丁
- 同虚空藏の御祈願の事 同圖 四丁
- 同鎌倉の行の事 一丁
- 同安房國の歸りの事 一丁
- 同叡山に往きの事 同圖 一丁
- 同臨濟の僧の道を問ふ事 一丁
- 同東福寺の材木御寄附の事 六丁

△下総之部 二十丁 高祖泉涌寺に往ふ事 七丁

△岩代之部 廿丁 同三井寺に至りふ事 全

△磐城之部 全 同南都并高野山天王寺に至りふ事 全

△能登之部 廿丁 同京都に赴きふ事 全

△越後之部 全 同為家卿と和歌の秘傳を受ふ事 全

△佐渡之部 廿丁 同叡山に帰りふ事 同図 八丁

○洛陽檀林 廿丁 同番神の示現を感ふ事 九丁

○関東檀林 廿丁 同天照大神宮を拝しふ事 全

○祖師先師花押拜 全 同法華宗御建立の事 同図 十丁

○山城法華順拜 全 同四格言を建ふ事 同図 全

△立像海中出現 廿丁 同景信よ逐きふ事 十二丁

△日像上人茶床 廿丁 同再鎌倉松葉谷に住しふ事 十三丁

△橋法難の図 廿丁 同機し水を覓る事 全

△妙顯寺の図 廿丁 同愛深明王不動明王を拝しふ事 十四丁

△相村雲御所 廿丁 日朗御弟子となる事 全

△瑞龍寺の図 廿丁 富木常忍檀越とある事 同図 十五丁

△松崎妙田寺の図 廿丁 高祖註法華經を著しふ事 十七丁

△深州元政庵の図 廿丁 大風雨洪水の事 全

△深州注塔寺 廿丁

△大境大僧正 廿丁

△常寂寺風景の園全

元年

大地震の事

全

○京都靈場略圖全

三年

高祖岩本實相寺入藏經を閲する事同図

十八

△東京同園全

全

御父次郎重忠卒去の事

全

△大阪同園全

全

大風雨洪水の事

全

△東國筋同園全

元年

日月蝕飢饉疫病の事

全

△北國路同園全

元年

高祖安國論を時頼へ上書の事 十九丁

△佐渡國同園全

全

悪徒松葉谷の菴室を焼する事同園 二十丁

△西國筋同園全

全

富木氏堂を營て高祖請する事 全

○祖書内外抜萃

元年

高祖吉田兼益神道御傳受の事同園 廿三丁

△波木井殿御書全

全

同鎌倉より歸りぬ事

廿四丁

△松葉谷焼討

全

同伊豆國伊東へ流されぬ事同園 全

△伊豆御流罪

全

上原弥三郎の事

廿五丁

△房州東條御

全

高祖和田の房室より移りぬ事 廿七丁

△法難御妙判

全

伊東朝高狂乱隨身佛の事同園 全

△相州竜の口頸の座

全

高祖工藤氏の書を賜ふ事

廿八丁

△御難御妙判

全

平重時死去の事

全

△佐渡國左遷

全

高祖伊東を赦免の事

全

△御妙判

全

同松葉谷より御歸住の事

廿九丁

△知者愚者題目 百字

大學三郎が事

全

を唱ふ同意の支

高祖安房國よ歸りぬ事

三十丁

△五欲を捨て佛冥
果を願ふべき支

同御母堂病氣の事同図

全

○一切經の濫觴專手

同癘鬼を送りぬ事

三十一丁

通計四十八章

同小松原御難の事同図

全

頭書目録終

同上総國よ往ぬ事

三十二丁

藤原よて庄屋次郎助檀越とある事 三十三丁

高祖法華題目鈔を著しぬ事 三十四丁

富木氏法義を論むる事 全

○珠數功德の事

或書に曰く珠數といふ

百八煩惱あり惣て

百三十六返あり母珠ハ

佛界あり余ハ九界あり

數百八煩惱即菩提

生死即涅槃なり念數

を廻すハ三心即三徳あり

七返ハ萬皆滿の義あり

一七日を以て一切の

高祖の母堂卒去の事

全

高橋五郎時光が事

全

本國院日頂尊者の事

三十五丁

齋藤兼綱の事

全

蒙古より書簡を贈る事

全

日輪並び出る事

全

高祖御勘文の事

三十六丁

安藤某を津輕へ送る事

全

月輪三ツ並び出る事

三十七丁

夏満あり二十返り
また満の義に又二十返り
より緒留まをの三十三返り
ハ是観音の三十三身と
表まると又珠数とい我
等が五大あり五大と
五大明王あり皆不動尊
形あり是百八の煩惱と
打摧て百八尊の不動と
顕るあり此珠数と上へ

| | |
|--------------|------|
| 高祖甲斐國吉田より往る事 | 今 |
| 蒙古人日本人を捕へ歸る事 | 三十八丁 |
| 高祖富木氏より書を賜ふ事 | 今 |
| 安房上総疫病流行の事 | 今 |
| 良觀雨を祈る事 | 三十九丁 |
| 高祖兩の御祈の事 | 四十丁 |
| 僧の行敏が事 | 四十一丁 |
| 良觀説訴の事 | 今 |
| 頼綱高祖の菴室を囲む事 | 四十三丁 |

引あぐるは上求菩提こ
下へ引さげるは下化衆
生あり是皆佛界より餘
の九界の應を垂るあり
露といは福智の二徳あり
迷は則百八煩惱と号け
又百三十六地獄と名
つるあり悟は則妙覺
一佛の如来と名付るこ
夫珠数といは珠の教と

| | |
|------------------|------|
| 高祖を捕へ平朝直より預る事 | 今 |
| 日朗等六人を地牢より囚ふる事同図 | 今 |
| 高祖龍の口御難の事同図 | 四十五丁 |
| 架装かけ松の事 | 四十七丁 |
| 星降の事同図 | 四十八丁 |
| 陰陽師占の事 | 今 |
| 高祖佐渡國に流されぬ事 | 今 |
| 高祖蛇の害を避ぬ事 | 五十丁 |
| 巖の題目の事 | 今 |

連ぬく珠とい我等
心性の珠あり教とる
我等が煩惱の教あり
故に珠を研ねれば光り
顕る煩惱を研けむ
忽ち成佛と云ふ
○袈裟の事
袈裟は道服とも離
塵服とも法衣とも蓮
華服とも又慈悲衣

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

波の顛目の事同図 五十一丁
關提の輩高祖を憎む事 五十二丁
阿佛房千日尼の事同図 全
他宗の輩高祖を害せんとする事 五十三丁
重連利解の事 全
諸宗の僧衆高祖へ難問の事 全
高祖重行軍あるを告めふ事 五十四丁
辨成問答を請ふ事 全
鎌倉騒動の事 全

福田衣等の異名多
一又三衣とい一より
僧伽梨二十五条あり
乞食又の説法の時
著は二より鬱多羅
七条あり礼拝誦誦
のとき用ひ三より安
陀會五条あり是ハ
寺中房室に居る時
著一又旅中等用ひ

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

日朗寺赦免の事 五十五丁
佐渡の太守朝直高祖を讒言の事 五十六丁
嚴島女の事同図 五十七丁
最蓮所業を問ふ事 五十八丁
高祖十界の本尊を書きし事 全
太守朝直良觀が讒を信ぜる事 五十九丁
浄土宗印生ぐ事 全
蒙古人日本の風俗を記する事 全
執權時宗家臣頼綱夢想の事 六十丁

由て雜作衣ともいふ
 阿含小曰く四無量
 を修するも三法衣
 と服すと是則ち慈
 悲のむけ服あり
 智度論よ曰く佛弟
 子ハ中道よ住すらば
 故三衣を著る外道
 ハ裸形なりて恥る事
 なり白衣ハ多貪よ

| | |
|--------------|------|
| 高祖赦免の事同図 | 六十一丁 |
| 同佐渡國御發駕の事 | 六十三丁 |
| 小山伏高祖を迎奉る事 | 全 |
| 高祖官府へ御返答の事 | 六十五丁 |
| 同身延山御隱栖思召立の事 | 六十六丁 |
| 修驗者善智が事同図 | 六十七丁 |
| 高祖御說法并御祈禱の事 | 全 |
| 鶉飼の翁が事 | 全 |
| 高祖新居よ移りし事 | 七十丁 |

して重著ると云く
 律よ云袈裟の染色
 ハ青黒木蘭の三色
 如法ありとら又袈
 裟の功德を云僧
 祇よ曰く金翅鳥ハ龍
 を以て食すと云兩の
 翅を羽たさると相
 去ること五百五十由
 旬あるも海水開け

| | |
|------------------|------|
| 蒙古軍を起し日本へ渡來の事 | 七十二丁 |
| 對馬國八幡の祠火起る事 | 全 |
| 鎮西よて蒙古と戦争の事 | 全 |
| 高祖弥四郎を惜みし事 | 七十二丁 |
| 日朗万壽片呂を身延山よ伴ふ事 | 全 |
| 蒙古より書簡を贈る事 | 七十三丁 |
| 善智高祖を害せんと謀る事同図 | 七十四丁 |
| 高祖妙經要文を經一店よ口授しし事 | 七十五丁 |
| 日合高祖よ代て下總野呂よ往事 | 七十六丁 |

て龍宮現ず龍師て
袈裟を求て宮門の
上よおく金翅鳥見て
敬怖を生むとりの
まゝ或書よ曰く二十
五条ハ三界二十五有
を表し九条ハ三界の
九地ハ配立し七条ハ
七地五条ハ五地ハ配
すと云々猶季々一六

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

蒙古の使を誅伐の事 七十七丁
宗仲高祖の鹿食を感ぜる事 全
高祖一尊四菩薩の像點眼の事 七十九丁
兵庫光基を喻しむ事 全
日進竜象を詰問の事 八十丁
七面天女の事同図 八十二丁
高祖日々御説法の事 八十三丁
同富木氏一族の疫病を救ひむ事 全
法印寂海受戒の事 八十五丁

六物因釈門章服儀
等を見しむべし

○衣の事

或書よ曰く衣ハ忝
も大聖釈迦牟尼佛の
着しむ衣あり黒色の
無明煩惱の体あり白
色の法性の覚体を
表し法花經より外の
余經の心の煩惱を離

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

嚴誓法華宗を説ける事 全
江川吉久よ曼荼羅を賜ふ事 八十六丁
御門人日法彫刺し工ある事 全
吏氏の妻子祝髪之事 全
地牢よ囚る者誅戮の事 八十七丁
日持法華向答を撰ずる事 八十八丁
蒙古来寇諸方防禦の事 全
同西海の諸將と戦ふ事同図 八十九丁
日月旗曼荼羅の事 九十一丁

○高祖紋所の緣由

高祖大士俗姓の先

蹟の内大臣藤原鎌

足公より二代之正嫡

備中守共資正曆元

年京都を去て遠江

國村御の里に住し

けるる男子を以て

憂ひ朝夕神を祈願

たす夏久一然るに

寛弘七年正月元旦

高祖大菩薩御尊像
天津兒屋殿命

大織冠鎌足

皇極時時興諸王子等謀入鹿父子

大比等 房前 眞指 内膳

良春 良宗 共資 共直 重直 重實

盛直 俊直 政直 重直 重實

重友 重友 重友 重友 重友

重友 重友 重友 重友 重友

重友 重友 重友 重友 重友

重友 重友 重友 重友 重友

重友 重友 重友 重友 重友

本化高祖大士影



同國井谷明神
靖けけら社内盧福
の幹筒井の傍りに
綾の衣よ包こころ氣
高き男子あり眼の
光り初旭は輝き尋
常なるぬ稚子あな
共資是ぞ神の賜ふ
らんとして我子とす
養胡けらが生長よ
隨ひ智勇万人超

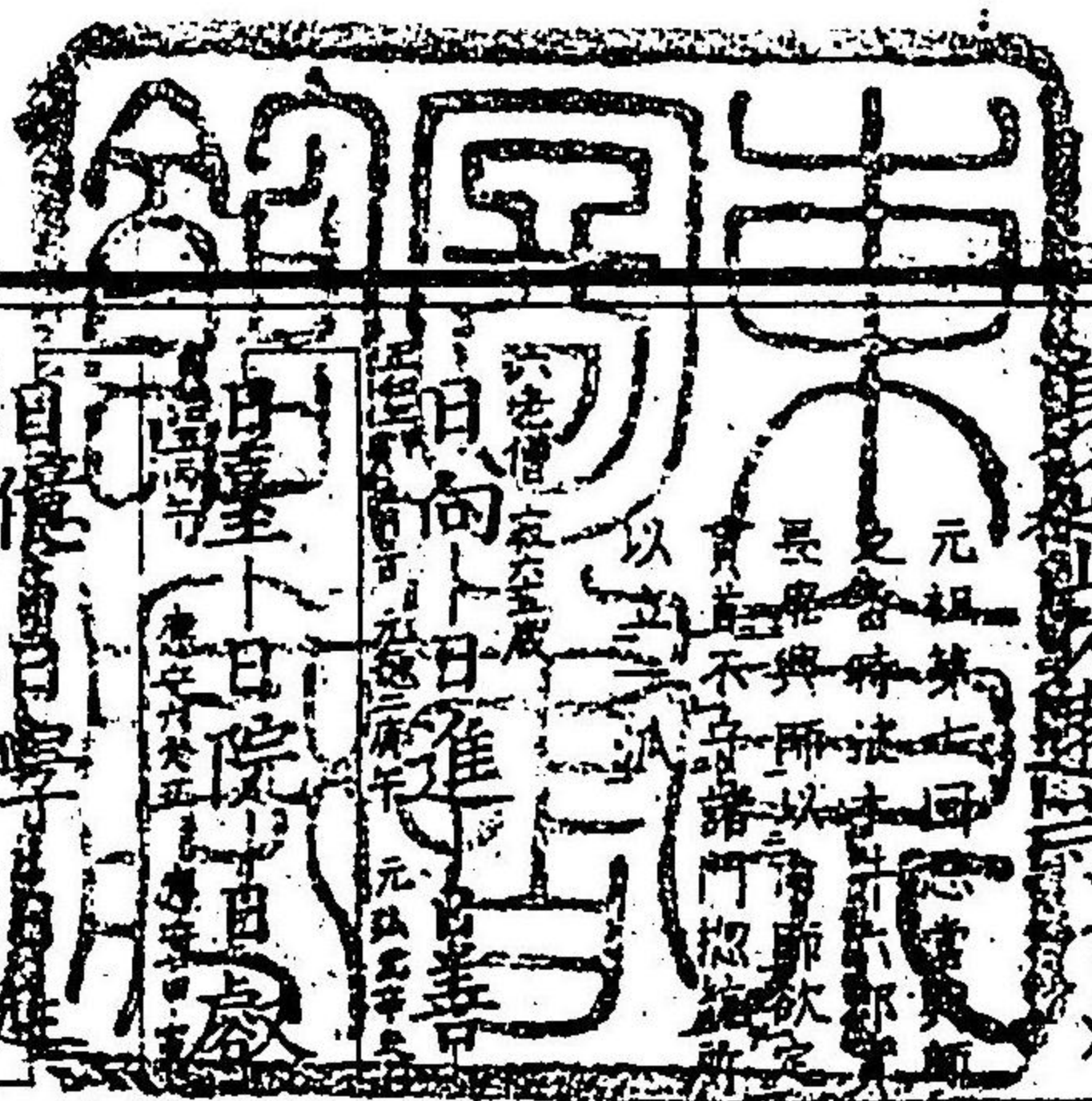
たり乃我女を配合せ
 備中大夫共保と喚び
 神前の奇瑞より姓を
 井伊と名乗り井折
 盧桶と家の敷所を
 宣めける教付の後盛
 直の三男日國山名郡貫
 名と領居するを以て
 貫名四郎政直と号
 是高祖大古祖
 先あり



口画芝本銅判

法華宗總本山

身延山久遠寺 甲州



- 日朝 日意 日傳
- 日鏡 日叙 日整
- 日新 日賢 日道

頭書 日蓮聖人御一代記圖繪

貞應元壬午年 人皇第七十七主後堀川天皇の御宇承久四年四月廿日改元高祖姓の藤原御父の貫名次郎重忠御母の清原氏毎に旭日を拜し念誦せり。或夜の夢に日輪蓮花に乗じて其胎に託すと見て身ごもり給ひ。二月十六日に高祖を房州長狹郡小湊小生み給ふ。これより先近き海中に青蓮花を生じ其花十

日重 日乾 日遠
 元和元年 寛永元年 享和元年
 日祝 日要 日深
 元和元年 元和元年 元和元年
 日暹 日境 日真
 慶長元年 慶長元年 慶長元年
 日延
 同四大本山ノ一
 長榮山本門寺 池上
 武州
 開基日輪書手與比器
 谷抄本寺兩寺一寺也
 日輪 日山 日行
 長安元年 永徳元年 永徳元年
 日壽 日調 日純
 享和元年 大徳元年 天保元年
 日陽 日現 日暉
 天保元年 永徳元年 享和元年



白尊 日詔 日友
 慶長元年 享和元年 享和元年
 白樹 日遠
 寛永元年 享和元年
 白東 日耀 日豊
 大徳元年 大徳元年
 白通
 同四大本山ノ二
 具足山妙頭寺 京都
 日像菩薩 大覚
 貞享元年
 朗源 日露 月明
 享和元年 享和元年 享和元年
 白具 日芳 日廣
 大徳元年 享和元年 享和元年
 白教 日亮 日紹
 天保元年 慶長元年 享和元年

餘莖光の色鮮盛なり。誕給ふの日異香室に
 ち清と泉庭に涌く。高祖生れたまひてかたち
 凡あらず父母甚これに愛し。善日磨と名付給ふ。
 其後五十五年を経て高祖自から父母の家
 本化の道場とあり。高光山誕生寺と名づけ。御
 弟子中老僧曰家上人を以て其蹟を嗣せ給ふ
 今の小湊山誕生寺是あり。

○同二癸未年
 嘉祿元乙酉年 元仁二年 四月廿日改元
 ○同二丙戌年
 元仁元甲申年 貞應三年 十月廿日改元
 ○同二戊子年
 嘉祿三年 十月十日改元

日行 日鏡 日豐
本都 慶長六年 三月五日改元

日延 日春 日空

日耀 日京 日利

同四大本山ノ三

大光山本園寺 京都
日曆貞和元年以鎌倉 松葉谷寺 後洛陽

日印 日靜 日傳
開基 隆慶寺 隆慶寺 隆慶寺

日經 日嚴 日聰
慶長九年 慶長九年 慶長九年

日曉 日圓 日亮
文治元年 養治元年 永治元年

白了 日尊 日助
永正元年 永正元年 天正元年

白栴 日禎 日桓
天正元年 天正元年 天正元年

白韶 日運 日廷
大正元年 大正元年 大正元年

白隆 日輝 日從
大正元年 大正元年 大正元年

白宜 日周 日詮

白達 日充 日銳

同四大本山ノ四

正中山法華經寺 下總
別當 法華寺 中老僧

日常 日高 日祐
永正元年 正徳元年 徳治元年

日尊 日暹 日薩
應永元年 應永元年 應永元年

○寛喜元己丑年 安貞三年 三月五日改元

○同三辛卯年

○天福元癸巳年 第廿八主四條天皇の御守 貞永二年四月十五日改元 (御年) 五月

清澄寺小入給ひ。文字と法印道善に学び給ふ。

御名を藥王曆とららたれ給ふ。入寺ハ五月 十二日あり

○文曆元甲午年 天福二年 十月五日改元 ○嘉禎元乙未年 文曆二年 九月十九日改元

○同二丙申年 ○同三丁酉年 (御年) 十六

すゝみち道善を礼して御髪をおろし受戒し



日有 日院 日親

日院 日珙

日曉 日通 日統

日述 日因 日慈

日侃 日忠 日現

日窓 日龍 日遠

日長 日仁 日演

日兼 日貞 日俊

日亮 日休 日威

日廷 日允 日意

給ふ 十月八日 御名を蓮長となづけ。諱と是生と

道善命せらる。後之づから日蓮とあらため給ふ。

真言の業を道善小受日夜おこたり給ひばく。

車相教相に通じ給ふ。且誓願して遊方遠くま

く。諸宗の学を究めんと則山上の虚空藏に

いのつと給ふ。行まゐるの晨げごかき僧手づから

光かやく明珠を高祖ふあたへ給ふ。これを受て

左の袂におさめ。夢とも現とも覚へたまひた。

日徳 日秀

法華宗惣本山

及び四箇本山ハ

既に改正は據ると

いへども各府縣下

本山の如き六國分

を以て列次は看客

其錯雜を尤むる

勿れと云ふ



△山城

具足山妙覺寺 洛陽

日實明源通光
日實明源通光
此寺或説曰日實弘通
西國時明源遷化故日
實偶主妙頭寺

大覺 朗源 日實

日成 日遵 日延

日善 日意 日察

日住 日享 日護

日賞 日兆 日顯

深く靈應を感得給ふ。

○曆仁元戊戌年 嘉禎四年(御年) 鎌倉小ゆかん

と玉ひ。武州程谷の旅籠屋小宿一玉ふに主

浄土宗ふて。他の像經を蔑にす。高祖これを諭

玉ひ。既に鎌倉ふいたり。浄土を大阿小学び。又

禪律の碩学小つめて。其宗義を問ひたまふ。

○延應元年 曆仁二年 二月十日既元 ○仁治元庚子年 延應二年 七月十六日既元

○同二年丑年 ○同三年寅年 (御年)

日鏡 日典 日興

日亮 日桂 日允

日通 日充 日允

日進

具足山立本寺 洛陽

大覺 朗源 日實

日實 日禘 日俊

日經 日抽 日生

日純 日陽 日裕

房州に歸り玉ひ。清澄寺にして。戒體即身成佛
義を著一玉ふ。又鎌倉に往きたまふ。叡山の尊
海事有て來るに逢玉ふ。傾蓋ある交のごと
これにゆつて。具小叡山小往玉ひて思召やう。
此山ハ。日本の天台山あり。心静ふこふ存ふ。
必び得る所あらんと則東塔の圓頓房に住
玉ふ事。すて十二年。心を清うして。三藏小御
目をゆゝ玉ひ。鈔する所の大藏要文あり時々

日弘 日泰 日英

日遙 日審 日芳

廣布山本滿寺 洛陽

日印 日靜 日傳

日秀 日善 日燈

日通 日威 日齋

日重 日乾 日遠

日深 日暹 日然

日將 日明 日育

日任 日存 日榮

叡昌山本法寺 洛陽

日親 日祇 日澄

日淳 日敬 日憲

日便 日堯 日圓

日通 日因 日慈

日芳 日憲 日長

日報 日休 日光

日德 日正

聞法山頂妙寺 洛陽

日祝 日言 日琬

衆座にて台教を講論し玉ふ其能交り玉ふ所ハ
 靜明經海心賀政海心聰尊海あり是皆とまこの
 高僧あり高祖ハ其一人ふして三塔の推服する
 ところあり或時衆に告て言ハ慈覺以來權實
 相乱きて開祖の軌則廢る實ハ嘆息すべき所
 なり吾不肖あるを雖も祓ぐべく此弊を掃除
 せんとも綱衆固執これを聽て信ぜば臨濟の
 圓尔曹洞の道元宋より歸て宗と都下に唱ふるに



日曉 日流 日忠

日瑞 日龍 日仁

日貞 日堯 日威

日意

法鏡山妙傳寺 瀋陽

日意 日胤 日肝

日請 日曉 日惠

日豪 日遠 日盛

日要 日在 日真

日室 日遲 日勇

白健 日通 日令

白陽

本能寺 洛陽

大覺 朗源 日露

日隆 日信 日登

日明 日禎 日興

日增 日定 日曦

日侶 日諦 日承

わひぬ。高祖往て其道を問ひ玉ふ。かわて異國

の風俗小おふ。二人の僧も。そのの程。一通

りに應對すといへども。後の其学徳に心酔て。時

々音信を通しけり。圓介。東福寺を建るに及て。

高祖材木を寄附し玉ふ。かの山徒は。く稱し

て。もつて榮すといふ。

○寛元元癸卯年 後嵯峨天皇八十五 仁治元年三月五日 〇同二甲辰年

○同三乙巳年 〇同四丙午年 (御年二十五)

泉涌寺にゆき玉ひ。宋の僧道隆。小見へ玉ふ。泉

涌寺ハ多く宋本の書を藏む。高祖これを讀ん

ことを請玉ふ。既ありて又三井寺に遊学し玉ふ。

○寶治元丁未年 後深州香皇第九十五 〇同二戊申年 (御年二十)

南都の七大寺。紀州の高野山。攝州の天王寺に

遊学し玉ふ。各其道を研究て。且科長聖徳太子

の御廟。之男山八幡宮とを拜し玉ふ。

○建長元己酉年 寶治三年 三月十八日改元 〇同二庚戌年

白堯日行日經

白遠日證日庸

白運日善日達

白宥

卯木山妙蓮寺洛陽

大竟朗源日齋

白存日道日隆

白應日忠日盈

白鮮日賢日舜

白源日然日感

白東日秀日省

白崇

妙塔山妙滿寺洛陽

開基日什當寺興東州
妙法寺通州玄妙寺三
一寺也妙法寺台宗
之時當寺後成法華道
場寺通受相承嘉慶年
中於洛陽弘法

日什日義日仁

白運日舜日通

白因日性日成

白遵日博日教

○同三辛亥年(御年)洛不ゆと玉ひ書肆不肆書

五條油小路天王寺屋浄本が宅あり浄本の

孫通妙の代にいとりて宅を變ドて寺とあす

神カ山本蓮寺とあづく今のましくけるに或

下立賣ふある妙堯寺是あり

儒家不就て講説を聞玉ひ又藤原為家卿家也

おまみへて和哥の秘傳を受兼て書と学玉ふ

己ふして東寺に遊ひ法印真廣不就て密家の

秘書を聞一玉ひ佐女牛ふゆと八幡の詞を拜

一玉ふ真廣の西八條の法華堂小住り

今の湖華堂信住庵ハ其旧跡を



日也 日存 日建

日奉 日誠 日誓

日親 日崇 日敬

日長 日行 日盧

日殷 日淵 日經

日善 日圓 日純

日迅 日乘 日延

日要 日聖 日行

日忠 日英 日休

日登

白辰

要法寺

洛陽

日華正和元年開治
陽住本寺上行寺等

日興 日目 日尊

日大 日源 日元

日長 日禪 日廣

日法 日在

日尹 日圓

日從 日得

日嚴 日蓮

日辰

日圓

○同四壬子年(御年三十一) 叡山に還り玉ふ。こゝに於て遊学多年おして其業既になれり。曰諸宗の祖権を執實を排き。これ釈門の罪人とも謂へざり。獨天台傳教あり。吾間然する事あり。然といへども。迹化を以て。像法おいつるものあり。末法の弘通の如きに至てり。世尊これを本化命トド。其道の事の一念三千。大お台家の弘むる処不異あり。今末法二百餘年。まことに其とまに

あたる。吾不肖ありと雖ども。必まことに一化を開き。以て本化の利見を驗さんとす。と此小番神の示現を感むる事あり。まづから神名を記し。画工をして。こまを圖せしむ。

○同五癸丑年(御年三十二) 此春房州小歸らん。こゝに玉ひ。道を勢州小とり。間の山淨明寺に宿し。大神宮を拝して歸り玉ひ。たましく妙見菩薩。こゝに示現する事と

日性 日恩 日亮

日陽 日成 日蓮

日體 日祐 日詮

慧光山本隆寺洛陽

日真永正年中開之
去月明、日、際、為祖

大覺 朗源 日齋

日真 日鎮 日唱

日映 日諦 日雄

日修 日鏡 日證

日遵 日現 日順

百承

光了山本禪寺 洛陽

日印 日靜

日陳 日登 日臺

日源 日導 日盛

日宏 日保 日邵

日求 日忍 日然

空中山寂光寺 洛陽

日淵 日海 日深

日治 日香

妙見大菩薩
示現



後、
妙見町

感^{かん}ト玉^{たま}ふ人^{ひと}ま^ま是^{これ}を奇^きありと^と比^ひこれより清^{きよ}

澄^{すみ}寺^{でら}に帰^{かへ}り玉^{たま}ひ室^{むろ}を寺^{でら}の傍^{かた}小^こ構^{かま}へ玉^{たま}ふ四月

廿^{にじゅう}二^に日^{にち}三^{さん}昧^{まい}に入^い玉^{たま}ひ廿^{にじゅう}八^{はち}日^{にち}三^{さん}昧^{まい}より起^たて旭^{あさ}

日^ひ小^こむらひ高^{たか}く法^ほ華^けの題^{だい}目^め南^{なん}無^む妙^{めう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^げ經^{ぎやう}

を唱^{とな}へ玉^{たま}ふ實^{じつ}に本^{ほん}化^け迹^{せき}日^{にち}弘^{こう}法^{ぽう}の權^{けん}輿^よあり時^{とき}

にこの日^ひ大^{だい}小^{せう}緇^し素^そを會^{あひ}ささごとて言^{ことば}くまはに

今^{いま}末^{まつ}法^{ぽう}小^{せう}修^{しゆ}行^{ぎやう}すべ^{すべ}さの唯^{ただ}法^{ぽう}華^けの題^{だい}目^めあり

の之^{これ}六^むれ世^せ尊^{そん}塔^{たつ}中^{ちゆう}小^{せう}付^ふする処^{ところ}あり衆^{しゆ}それ

本涌山妙泉寺 洛陽

日蓮 日蓮 日信

日春 日運 日真

日永 日圓 日亮

日順

深州山寶塔寺 洛南

日像 良桂 日桂

日蓮 日賢 日学

日宗 日銀 日感

日滿 日性 日通

これを修せよ且四格言をたてて云浄土の祖

弥陀の誓願を執以て實教を誘ふて或ハ難行

と一或ハ雜行と一或ハ捨閉閣抛と一其報

阿鼻におつ念佛無間と一あり禪ハ臆見

小遅ふして聖教を蔑ふと波旬の徒とハ禪天

魔と一あり密祖經王をりつて第三戲論

と一釋尊を廢して別小教主をたつこれを以て

國家をいづらば必まず此災害をよねくべし。

△尾張

妙光山本遠寺 熱田

日澄 日了 日尊

日音 日遵 日誓

日會 日運 日怡

日栄 日進 日近

日謙 日行 日詮

△駿河

岩本山寶相寺 富士

日源 日感 日興



四月廿日 宗音 御建立

今未法に當る 建長五年ハ未法 二百二年ハあり

日園 日昌 日富

日授 日恒 日依

日瑛 日長 日宜

貞松山蓮永寺

開基日持元祖遺化
之後弘法於異域

日持 日教 日圓

日達 日信 日乾

日遠 日明 日長

日攸 日尚 日近

日禪 日間



青龍山本覺寺 池田

日位 日嚴 日順

日教 日用 日勢

日釋 日甄 日東

日泉 日光 日護

日琮 日雄 日在

龍水山海上寺 村松

日位 日賢 日巧

日滿 日龍 日正

日澄 日圓 日海

真言亡國といふ三あり。律家の依憑をるともあり。
小乘に過ひこれ未法を行ふ。以て大乘の
地をうなむ。律國賊といふ四あり。衆これを聞
て驚て且怒る。邑主平景信法印道善と謀て。
りつて高祖を逐ふ。註画讚み曰く。其夜寺中を
難。是淨頭義淨と交あるをりつて。これを
護る。ひそかに高祖を花房の青蓮房小宿ら
む。其相戒某まゝ高祖の化をにくむ。時に新に

日存 日啓 日應
 日通 日秀 日恒
 日實 日遙 日鏡
 日透 日沾
 龍王山妙海寺 沼津
開孝老僧
 日實 日頂 日守
十月十三日
 日定 日儀 日安
 日出 日法 日顯
 日永 日賀 日圓
 日雄 日領 日怡



日能 日窓 日巡
 日根 日行
 德永山光長寺 岡宮
開孝老僧
 日法 日春 日景
開孝老僧
 日賢 日用 日澄
 日達 日應 日淨
 日兼 日嘉 日意
 日詮 日運 日真
 日周 日傳 日達
 日深 日祐 日相

彌陀堂を管三。高祖を請じて閑堂せしむ。其實
 の害をなさんと欲するあり。高祖ゆゑ玉ひて。
 阿尊の安養の化主釋尊の此土の化主。こゝを
 捨てかゝる婦を豈もたらげんや。その人
 いよしくいかり。まことに害せんとす。たましく救ふ
 のありてまゐかる。五月鎌倉にゆかんまで。
 平群郡南無谷泉澤氏に泉沢氏を推頭。太郎
 といひ。母を妙福といふ。高祖を帰依し。法華堂
 を建つ。後小寺となる。今の安房國南無谷成就

高祖の御事
 一
 〇十三

富士山大石寺 多宝

日興 日目 日道

日行 日時 日阿

日影 日有 日乘

日底 日鎮 日院

日辛 日昌 日就

日忽 日精 日舞

白典

富士山本門寺 多宝

日興 日妙 日恩

山妙福寺 宿一玉ひ。順風を得て舟相州米濱小

至る。巖窟の中に座し。經を誦し玉ふ。是は宗門の

靈場とあり。高祖の尊像へ参詣するもの。去て

鎌倉不入玉ふに。炎暑甚しう志て。渴て越え就

て唱題し玉ひ。清泉忽ちこき出たり。名越松

葉谷小住し玉ひて。高祖室あり。本化別頭の教

をなす玉ふ。十一月台家の高僧成辨受戒す。開

化のはじめ若き弟子あり。敵の國を得るが如し。

白圓 日要 日成

白藏 日傳 日昌

白耀 日出 日賢

白健 日延 日優

白國 日殿 日淨

富士山本門寺 多宝

日代 日任 日盛

白猷 日琳 日顯

白眼 日出 日典

白心 日建 日春

日昭是あり。本成辨阿闍梨とて。六老僧の隨一。玉尺。經王山妙法寺の開祖是あり。伊豆國。田法王山妙法寺の開祖是あり。このと。祈禱。經をわらひ玉ふ。

○同六甲寅年(御年三十三)正月朔日。親愛深明王。日

輪中に現す多を見玉ふ。十五日より十七日に

いたりて。不動明王。月輪中に現するを見玉ふ。

四月廿八日。三十神を小壇に勧請し。祭て。護法

神と玉ふ。蓋き以よえい山に在て。靈應を

日悟日胤日映

自澄日順

富士山妙蓮寺多室

日華日相日眼

日清日祐日授

日達日頭日遵

日觀日諦

富士山久遠寺多室

日毫

感ずるをのつてなり。六月廿五日みづから愛

深不動を圖して記を上書きし。あつて門人に

たまふ。十月ある夜の夢に雷鳴て堂の前小落

ると見玉ふ其あつて総州平賀源有國の男吉

祥麻呂六老僧大國阿闍梨師孝第一の日月善

長栄山本門寺相摸國鎌倉長興山妙本寺の殿

来る。高祖一見して言予と起さんものハ汝り。

他年大に法鼓をならさんと。十六歳小して得

△甲斐

徳永山妙法寺小室

日傳開基老僧日全日尊

日春日源日頭

日讚日寺日淨

日樂日昭日恩

日依日閔日俛

日要日長日聰

日桂日定日廷

△相摸



夢の雷の
おちるを
見らる

經王山法華寺 五派

日昭 日祐 日蓮

日湛 日譽 日教

日英 日海 日傳

日周 日弘 日南

日苞 日産 日達

日亮 日遵 日通

日延 日叙 日衆

日雄

金谷山大妙寺 三浦

度す。日朗これなり。これとて高祖總州に遊ひ

玉ふ葛飾の浦より還らんとて玉ふに富木常

忍（常忍の）入道の名に於て俗稱ハ五郎浦と

云下総國若宮の領主あり高祖の大檀那後

小常修院日常上人といふ自家を本社の道場

とありぬ總州葛飾正中山本妙法華經寺其遺

蹟お鎌倉におもむかんとて從者數十人と

氏これきゆる。高祖とふねを同ふしていつく

僧ハ何宗といひ貧道といまど何宗といふ事を

日印 日栄 日賢
 日泉 日要 日從
 日善 日忍 日瑞
 日英 日明 日璋
 日慈 日速 日淳
 日有 日然 日航
 日慈 日亮
 △武藏
 妙光山法華寺
 日源 日善 日行



高祖船中 富木氏子 逢ふまふ

日明 日成 日耀

日豪 日胤 日瑞

日揚 日進 日誠

日晴 日禪

鳳凰山妙國寺 昂

天目 日獻

日遷 日教 日進

日享 日道 日能

日榮 日誓 日胤

日学 日城 日延

白達 日在

長耀山感應寺 谷中

元祖御在世草創之地也云々文明始碑文谷日權中興依之受彼山之支配年久矣近年與彼山相對而後卒成一本寺

日蓮大菩薩

白源 日耀 日嘉

白昌 日春 日隆

白運 日進 日圓

白長 日妙 日誠

日純 日英

定めずいづく此項とく僧の日蓮といふ者諸

宗と罵唯法華の題目と唱ふこれをおねりや

いとくこれをおねりいづく其説いづく高祖則

平日弘む所の法要と語る富木氏おどろひ

ていづく御僧のまあに其人はあらざる事

なうらんや針芥の遇あり吾居ハ葛飾の若宮

少あり他日幸にこれと臨と舟金澤より

岸に上り行語して別玉ふ

○同七乙卯年(御年三十四)註法華經を阿らや玉ふ

○康元元丙辰年(御年三十五)二月廿九日

大雨洪水八月六日大風雨このと高祖かま

くらにましく四條頼基進士善春および房

洲の人工藤吉隆武州の人荏原義宗右衛門大

夫宗仲より小来り檀越となり

○正嘉元丁巳年(御年三十六)八月廿三日

大地震その坼る所水湧き火燃山崩屋仆る此

經王山本光寺

日什 日範 日運

日賢 日嚴 日祐

日通 日通 日近

日長 日鏡 日淨

日迎 日陽 日頭

日現 日現 日東

日詮 日啓 日淨

長栄山本門寺 池上
大坊上人列祖

高祖

實相

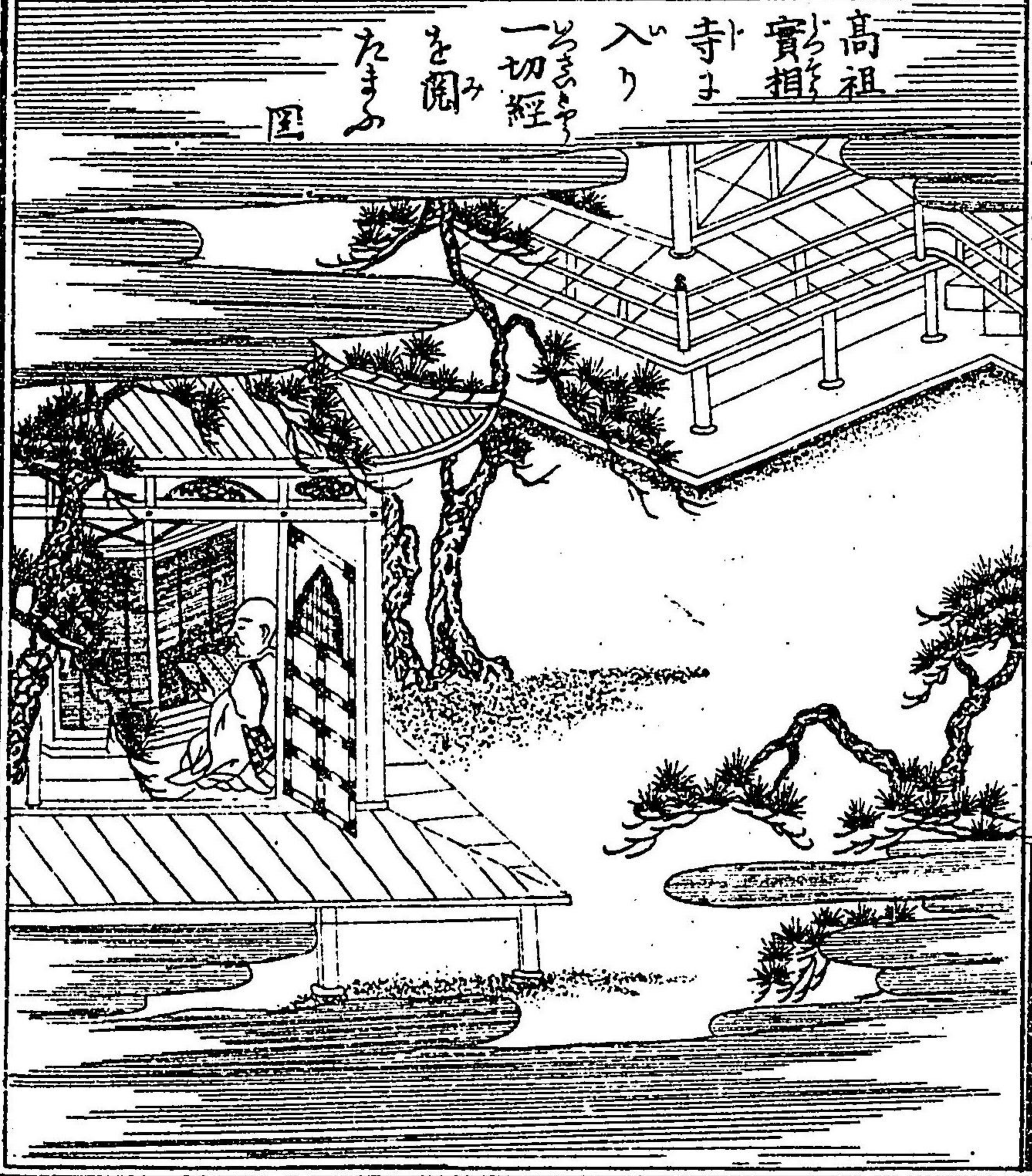
寺

入

一切經

を閱

たまふ



白澄 日恩 日善

白俊 日增 日翁

白胤 日現 日觀

白恍 日藝 日年

白觀

△安房

高光山誕生寺 小湊

日家 日保 日靜

日承 日東 日輝

日祿 日藏 日堯

年又大に早以甲州南部實長受戒す。

○同二戊午年(御年)正月駿州にゆきたまひ。

沼津の驛に宿し玉ふ經を誦して八大龍王に

供し玉ふ去て岩本實相寺此時の雄利あり。のちに

本化の道小入大藏經を閱し玉ふ時に衆のた

め妙經を講し玉ふにわけて服せざるものお

し。二月一代大意と著し玉ふ十四日書成る。

御父次郎重忠卒す高祖其計を聞て大にかな

日出 日威 日眼

自然 日領 日稅

日延 日遵 日運

日明

妙隆山鏡忍寺小松原

日曉 日玉 日隆高祖御上 興基御上

日正 日契 日安

日弘 日曜 日運

日雄 日然 日領

日栄 日惠 日周

志み玉ふ。八月朔日大風雨洪水。サハ日榮感南ケイタクナン

斗と犯す。大流星乾より巽にむふ。このと

一念三千義三篇を著し玉ふ。

○正元元巳未年正嘉三年（御年）三月廿日改元（三十八）日月薄蝕

あり。飢饉して疫病流行人多く死に華嚴天台

の學僧おの書と著し。選擇集と駁す。高祖

よみて言其説可ありといふども。いまご謗法

の本を辯す。なを五十歩にして。百歩を笑ふ

△上総

常在山妙光寺藤原

日向 日秀 日禪興基御上 中老御上

日海 日悟 日證金孫御上

日臺 日胤 日狼

日傳 日泰 日精

日典 日合 日新

日就 日際 日東

日逞 日然 日俊

長園山就鳥山寺鷲峯

まはごごと。因てみづから守護國家論を以

らり玉ふ。其密家を外にせしめて。かつて選

擇を彈ずるものハ。宗を開の日淺し。暫養利

嗽鈍の術を施し。又念佛五篇權門無得道の義

三篇とあり玉ふ。

○文應元庚申年龜山天皇第九十一主（御年）正元二年四月十三日改元（三十九）

疫病いまごやまは。二月高祖災と攘ふ事を

記し玉ふ。四月法界因果を著し玉ふ。廿一日書

日源 日忍

白國 日陳 日運

日幡 日耀 日進

白恩 日曉 日乾

自然 日圓 日受

庭谷山妙福寺 墨田

日秀 日禪 日海

白悟 日藝 日淨

白行 日演 日惠

白經 日運 日來

なる。五月駿州南条兵衛行事と問ふ。よつて唱

題鈔とわらり。たまふ。廿六日書成てこれを

賜ふ。康元丙辰年より年々災沍あつづく。高祖言く。

薬師經やくしきやう小七難有て。唯二難ただふたがたを欠大集經おほいあつみきやうに三災

有て。二災ふたさい已すでよ起る其他諸の災そのほかのあつおこる所金光

明經あききやう仁王經におうきやうの所説ところのいふは異ことあらび。七月松葉が谷

の室中むろちゆうにましくて。立正安國論たつしやうあんこくろんを著あかし玉ふ。

十六日宿屋光則しゆくやひみつね。後のち法華ほふくわの行者ぎやうじやとあり。朗師

白允 日順 日鳳

廣永山妙覺寺 奥津

日保 日澄 日惠

白賢 日仙 日圓

白實 日傳 日真

白滿 日能 日義

白鏡 日娘 日嚴

白慈 日遵 日登

白道

△下総

精舎しやうしゃとなす。今の鎌倉行。よつてこれを前相州

時山光則寺ときやまひみつねこれあり。よつてこれを前相州

時頼ときたのり不捧ふたづぐ。其のぶる所そのぶるところをどめよ。八年々災の

よつて来る所よつてくるところといひ。後軍のちのぐんあへん事を未形みかたがたに

察さつし。國家こくがと安やすせん。玉ふ。これより先時頼

ふまをへて言いくも。國家こくがの謗法ぼうぽうと禁いせずん

ハ。かならず災あつあへん志こころうれぐ。時頼ときたのりうけが

と。果はつしてこそこひあり。故ゆゑよまを諫いさめる事ことが

くのごとく。八月廿七日。悪徒あくと夜よよ入いて。高祖たかその

正峯山妙興寺 中村

日辨 聖德太子 日忍 日淨

日法 日羅 日曉

日等 日現 日護

日妙 日行 日雅

日勤 日運 日進

日覺 日述 日還

長谷山本土寺 平賀

建治元年正月朔日 創之

日傳 日實 日滿

室を襲ふ。僧俗すべて數百人皆宗化を惡の徒

あり。善春等これと禦て創と被る。高祖其傍の

いひやと匿る。惡徒これを索れどもつるにむ

とむる事能は室を焚て去る。時に猿多く集り。

朝夕高祖の前に來て果食を供ぐ其いひやの

上に山王の祠あり。高祖ハ其神の使しむなる

事とあり玉ふ。これと一五時圖およひ雜著篇

をりらり玉ふ。總州よあそひ玉ふ。富木氏

日願 日鏡 日福

日意 日瑞 日遊

日曉 日隆 日嚴

日悟 日舜 日弘

日耀 日惠 日誠

日述 日令 日寬

日勝

真間山弘法寺 真間

開基日頂不詳示寂三月八日為弘道出因以其日為忌日其後於於舊寺日與日可以八月十二日為忌日也



惡徒 松葉谷 焚 卷室

日頂 日揚 日樹

日宗 日滿 日肇

日舜 日詔 日感

日立 日隆 日典

日眼 日晴 日深

日祐 日玄

長崇山妙興寺 野呂

日合 日言 日國

日了 日顯 日福

日證 日珍 日善



猿猴高祖
果食を
供する
圖

日嚴 日在 日英

日悟 日雄 日鷲

日觀

日誠 日述 日明

日玄 日講

△岩代

實成寺 會津

日尊 日郷 日傳

日周 日祐 日永

日安 日信 日要

堂を嘗てこれを請す。高祖暫これ小居して説法し給ひ手づから一尊四菩薩と鬼子母神とを刻み堂小安置と。州の曾谷教信秋元太郎太田乘明等来て檀越となる。台徒某受戒は日興あり。六老僧第三。伯耆公白蓮阿闍梨是あり。北山太右寺宣演本門寺等。浄土の僧鐘阿受戒す。日唱首顯房といふ文永十年の夏これあり。堂とさる事一里をかり。千足村といふ所小池

日清 日純 日我

日况 日珍 日前

日建 日有

寶塔山妙法寺

日什 日仁 日全

日叡 日滿 日戒

日曉 日傳 日承

日憶 日宣 日秀

日音 日增 日謂

日等 日好 日登

日秀 日治 日喜

日淨 日幸 日喚

日眼

△能登

金榮山妙成寺 滝谷

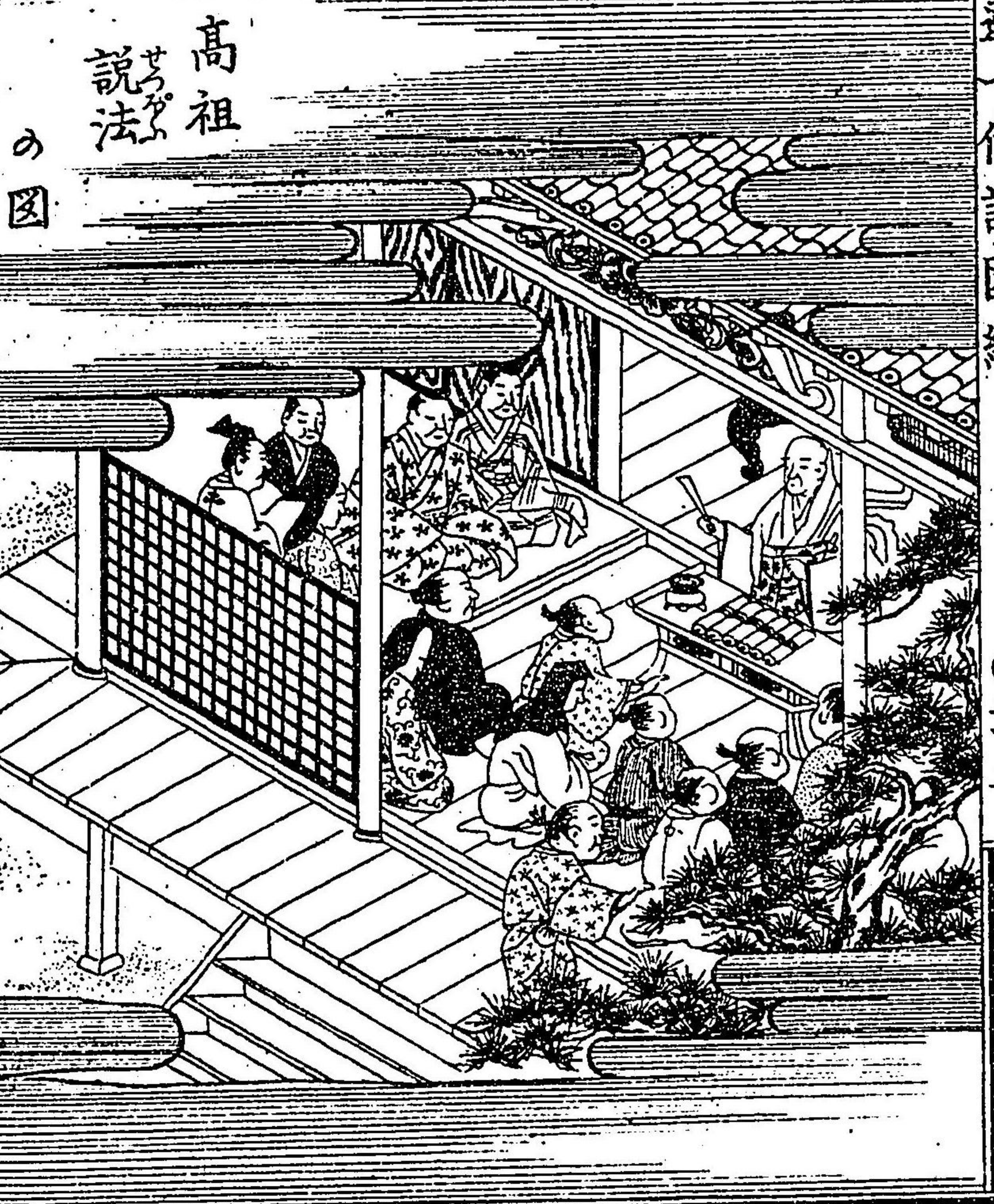
日像 日乘 日源

日海 日潮 日立

日存 日從 日實

日舜 日明 日充

日慈 日鳳 日淳



高祖の說法の圖

あり。時ふその神婦人と化してさつて高祖の
 手書の本尊と乞て去人あやみてこれと付
 て見るに池の邊にいつりて忽ち其本尊
 おのつから懸て櫻の木に枝あり。

○弘長元年辛酉年 文應二年(御年) 二月武州恩田

小至り玉ふ。番神問答記曰神領武州 時に吉田の大

祝兼益來て祝益行の家あり。高祖これ就て。
 神道の奥秘を問ひたまふ兼益いそく吾道他

日條 日豪 日傳

日俊

△越後

長久山本成寺

本成寺村

日印 日靜 日陳

日存 日頭 日誓

日將 日現 日覺

日意 日扇 日藝

日教 日伴 日嚴

日柔

法王山妙法寺

村田

日昭 日成 日運

日增 日授 日秀

日清 日蓮 日辨

日華 日弘 日南

日亮 日道 日為

△佐渡

蓮華王山妙宣寺

阿佛房

日得 日滿 日圓

日音 日存 日清



門小傳をゆるさば。志うれども師の不凡ある吾
 隠す所あり。高祖遂ふ鎌倉小歸り玉ふ。三月十
 三日富木氏供を献す四月二十八日書を推地
 四郎にたまひて信心をせむら玉ふ五月十二日
 平の長時長時の重時の子。武藏守に任じ。康元元年
 時頼隠居す。その子時宗幼ふを母へ。長時
 代て執高祖と豆州伊東に流る。日朗從えんと
 請ふ官これを許されど。高祖寂照母子離別の
 事をめつて。これを慰諭す。まゝ役人よ語て言

貞享四年... 一七九七... 一七九八...

京都旧檀林八箇所

松崎本涌寺 北山

内基 立本寺 教藏院 日生

同 十二世 文種寺 末七月廿四日

同 十三世 圓通院 日純

同 十四世 教藏院 日陽

同 十六世 唯心院 日弘

頂嶽寺 五世 奥林院 日侃

立本寺 十八世 本覚院 日英

同 十九世 報恩院 日遙

頂嶽寺 九世 奥善院 日仁

普門常に日を礼と一朝輪中に二芥の現する

を見る則奇異の思ひをなす一三つからこれを

圖ととくに異僧忽焉と一々来ていづく関東

の流入日蓮すさに此像を點眼をばへといふ

高祖ろく小論せしむに及ひて普門則往事

とおもひ出し六月六日に來て點眼を請ふ後

志むく礼を具て懇懃と通問と高祖をまよと其

志を感と玉ひえらから小影を刻と書を併て

法師 日東

本満寺 二十世 覚心院 日宿

頂嶽寺 大僧都 十三世 奥正院 日意

久遠院 日淵

中道院 日春

正善院 日通

羨心院 日亮

本園寺求法院

開基 本満寺 一如院 日重 十二世 元和九年八月六日



高祖を

伊東

竊る

圖

惟雲院日雄

善正寺 同基 本妙院日鏡

頂妙寺 七世 覺性院日端

中山興世 本法寺 十六世 鶴林院日兼

立本寺 二十世 灵鷲院日審

中山三聖 頂妙寺 十二世 一性院日威

立本寺 二十一世 灵祐院日芳

鶴樹院日啓

觀妙院日存

本滿寺 二十一世 觀樹院日等

弘長元年酉六月日



日蓮在判

南禪寺普門筆有之

日月一輪之像者南禪寺開山普門御筆也其緣起一輪二尊之像者予奉待金鳥尊天朝日輪光明中本地尊影現是則日月一輪陰陽一之根元也故取筆謹書寫之天下國家諸願如意祈然一夜沙門來曰日輪像開眼闍東流人釋子日蓮云云故弘長元辛酉六月六日伊豆國伊東配流下開眼之秘寶藏納永家門之寶物也

弘長元年酉七月合 普門

本成院日遠

鷹峰山常照寺 北山

檀林閑齋頭主 本阿弥光悅

閑基 身延山 寂照院日乾 二十一世 寛永十二年十月廿日寂

同 二十六世 知見院日暹

小西 能化 立正院日揚

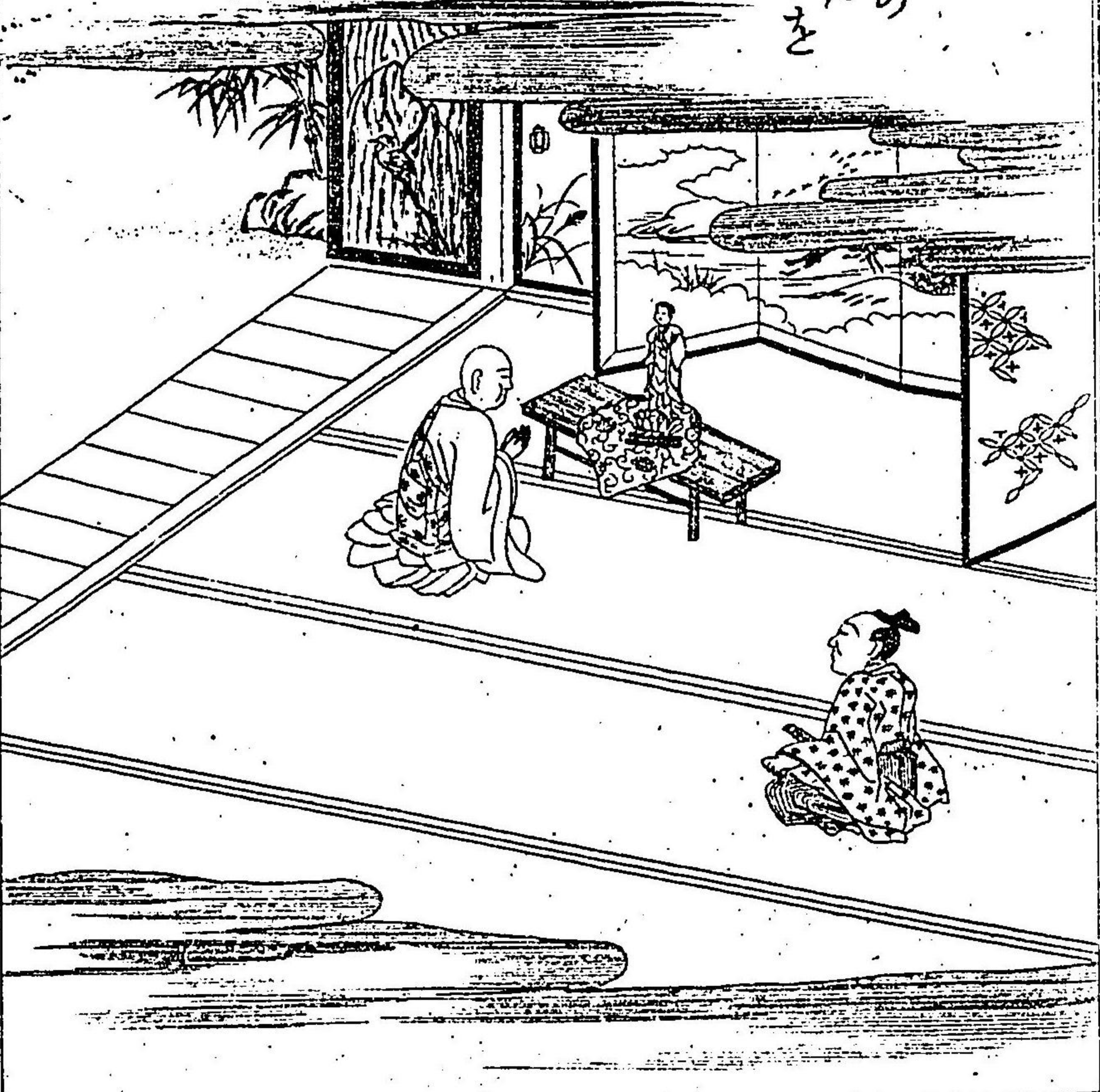
三知院日江

了智院日健

理性院日桂

本是院日理

高祖 立像の 釈尊を 拵受 図



中村 能化

通妙院日祥

一心院日延

興林院日德

寂遠院日通

興学院日秀

本地院日匠

勝光院日耀

妙慧山善止寺 東山

南基

本妙院日鏡

壽量院日鎮

りつて贈り玉ふ。小影今江東淺草長遠寺あり 普門をなす

よろろふ身を終るまでこれを奉じ。十三日高

祖和田の房室に移り居玉ふ。和田加茂郡伊東の郷あり

邑主伊東朝高狂乱を巫醫ともふ効あり。こに

おゐて高祖を請ふておまをいのらむ。即効有。

家舉て大によろろふ。潮高屋敷を寺に造る 朝高

いそく。吾嘗て立像の釋尊を海よ得る。弥陀を

信するを以てのゆへ。敢て崇敬せし。いまや

一音院日宥

顯壽院日演

中山寺世 詮量院日休

了一院日充

詮理院日陽

了珠院日榮

詮量院日近

了光山護國寺 山科

南基 法性院日勇

同十三世 寂遠院日通

十六世

化よ歸して二なり。然りといはざる此像。吾に

あらば。功德唯一家よ止む。師よ何らば廣く

天下よ及む。願くばこれを献せん。高祖拜受

して常にこれを奉ぜん。人呼で隨身佛といふ。

廿七日。弥三郎日用の諸物を供じ。

○同二壬戌年(御年四十二) 正月十六日書と。工藤氏

よたまふ。このと一宗教二篇上行口傳と著し

玉ふ。

妙傳寺 良靜院日令

再住 寂遠院日通

談心院日堯

一圓院日達

寂耀院日啓

雞冠井山真經寺村

通明院日祥

中道院日春

本源院日達

觀樹院日空

○同三癸亥年(御年四十二)二月時々異人の來るを

見玉ひ豫め赦有事を志り玉ふ往年平重時狂

乱して死す後怪異多し前の執權時頼帳然と

して感ざる所あり高祖を流す事ハ重時と長

男長時と實小處置以時頼を禪を好む權實

を口をさすへむといへと北政事私なり廿二日

長男時宗と議して牒を出して高祖を赦す此

月門人日乗とりふ牒を傳へて至る高祖鎌

妙龜山隆感寺大龜谷

智泉院日達

惠昇院日宥

久遠山本經寺小葉橋

妙雲院日承

關東旧檀林

妙雲山法輪寺下緒飯高

教藏院日生

蓮成院日尊

法雲院日道

倉小歸玉ひてふたむ松葉谷に住し玉ふ駿

州松野氏の子某松野氏六郎左衛門と稱す

來て得度す日持是あり六老僧兼六蓮花阿闍

松野永正寺開堂今の貞松山蓮永寺これあり

正応四年三月奥州津輕を過て韃靼不遊録

異域弘通本化の宗致

○文永元甲子年弘長四年(御年二月廿八日改元(四十三))檀越某書を

奉じて獻山の火災を告たてまつる御返書有

府の儒者大學三郎の妻已宗化歸大學三郎

身三十一世 心性院日遠
 中村九世 惠雲院日圓
 妙傳七世 智舜院日豪
 眞洞九世 禪智院日感
 池上十四世 中山院日友
 法五世 眞應院日達
 頂六世 禪那院日忠
 三六世 寂靜院日賢
 蘇十世 蓮乘院日東
 池十世 蓮乘院日東
 本十三世 圓照院日明

倉の儒言たり。比企能本と云ふ屋敷を轉トて寺と爲。長良山妙本寺と号す。四月十七日書を奉トて行事を問ふ。御答不審か。一玉ふ。高祖かつて大学三郎とありて。洙泗の三ちを問ひ玉ふ。大学三郎もまゝ。佛法を叩く。はるふ一信士とある。妻因て歸依す。七月五日慧星見る。長き事天よりくる。高祖曰く天象大よ變じ。これ余が安國論の所。自他叛逆の志あり。廿九日宗教一冊ある。特は法華眞

圓是院日耀
 壽量院日祐
 一乘院日艱
 池上二十世 寂遠院日通
 寂光院日龍
 妙高院正法寺上総小西
 立十五世 通王院日裕
 池上十三世 自證院日詔
 自足院日周
 法十六世 眞應院日達

言を優劣に。八月房州より玉ひ。先考の墓小詣で母堂を訪ふて。別離の情を慰め玉ふ。母堂時より年七十餘暴に病で死す。高祖すありち壇と松樹の下よりまうけ祈念し。神呪を持し。水を加へ口を瀦玉ふ。忽ちよみかへり玉ふ。これより壽を延ぶ事四年。人ありて權迹の奇特とす。房総の間大に疫病を患ふ。人皆禱を請ふ。高祖三づから往て。白布を經顯を書いて海に投す。

妙頭寺 十五世 奥善院日鏡

小湊聖 小松原聖 守玄院日領

行法院日行

崇原聖 池上七世 蓮衆院日東

本満聖 身延聖 知見院日暹

再住 守玄院日領

心了院日窓

應聖 立正院日揚

藻原 十九世 知覚院日然

妙頭寺 十七世 隆玄院日延



高祖の母堂 蘇生一の園

本具院日鏡

玄高院日長

要玄院日寛

日覚

日後

正東山本寺 下総中村

初飯高 能化 惠雲院日圓

本法寺 十一世 唯心院日同

同 十二世 正教院日慈

身延山 二十六世 顕是院日要

舟よのりこれと曳しむ。つて癘鬼をおくる。

又符を書し。井に投じ。これを飲し。病者

皆愈。符と投じ。井。總州夷隅郡澳津村あり。

後人井の側。寺を建る。嚴長山釈迦本寺

に。九月。莖房の蓮花寺ふまし。宗教一冊を

らり。玉ふ念佛無間の確論あり。廿二日。書

成是月。書と南部某小賜ふ。南部某ハ。六良實長

檀三子の一あり。十月。法印道善來り訪ふ。譚

なる法門よ。およぶ。高祖諭する。小宗教を以て

妙傳寺 十一世 実性院日在
 池上 十五世 長遠院日樹
 三所之 能化 寂靜院日賢
 遠壽院日充
 見理院日妙
 正覚院日條
 妙顯寺 十六世 鷲峯院日豊
 身延山 二十七世 通心院日境
 滝谷 二十世 妙心院日傳
 妙顯寺 十七世 隆玄院日延

されども法印いまごこれと信ざる事能はら。後漸その化し歸き男金の實信の子某祝髪す。日向これあり。六老僧第四民部阿闍梨又佐渡を建て師を請ひて開堂す常樂山妙光寺これなり。正徳元年南都實長の請ふ応卜て身延山瑞光寺に遷す。十一月十一日高祖小松原よりまき山景信固よりあり。小松原は長狭郡東條の郷なり。浄土を志んば高祖を仇のごとくに視て其黨數百人を率ひて高祖を囲む。御弟子鏡忍死す衆觀長

滝谷 十六世 一心院日延
 修禪院日俊
 喜見院日定
 中道院日春
 奥林院日徳
 再住 修禪院日俊
 法喜山妙講寺 松崎
 開基 常寂院日耀
 十月朔日寂
 壽量院日芳
 三所之 能化 寂靜院日賢



壽量院日遣

初玉作 能化 長遠院日蓮

圓通院日調

通玄院日運

清領院日饒

初野呂 能化 性智院日述

通心院日瑤

妙雲山蓮華寺 玉作

岡基 小湊金 長遠院日蓮 義忠三年十月廿日

長真院日榮

英大小創をうらふる。高祖もまゝに傷らる。天津

の城主工藤氏之丞平吉隆衆と率ひきたりて

救ひ。遂に闘て死す。忠吾、忠内といふ者忠吾、忠内兄弟

北浦氏東條高祖を守りおくる。清澄に至て別

る。高祖市ヶ坂の窟いほほに入創を療む。十二月十三日。

書と南條氏たまひて疾を問ひ玉ふ。因て信

を勸む。是歳繪像點眼ことと記したまふ。

○同二乙丑年御年 四十四総州そつしゅうゆき。鼻端はなはなの密寺みつじ

惠恩院日聰

揚善院日逗

明静院日浣

長宗山妙興寺 上総 沼田

荆基 池夫坊 中妙院日觀 慶文寺 慶文寺

守玄院日誠

性智院日述

持戒院日明

文也 日玄

安國院日講

小宿一玉鼻端の海上郡あり。寺主法を聽て

嘆服たんぷく日正ひただよこれあり。常州筑波ちやうぢくはをすきて。野州

那須なす小至り玉ひ。微よこ疾あり。温泉おんせん浴玉ふ。

温泉と距事二里餘りあひひら一つの石有。高たか五尺ごしゃくあり。

經頭きやうとうを書玉ひて。將來しやうらいを貽と玉ふ。土人棋石を守

歸路きりぢ藤原ふじわらふて。屋次郎やじらう助すけ檀越だんごつと成なり。

高祖命たかそとて。姓なと星氏ほしぢあらたまむ。蓋かきこれと

日ひより。光ひかりを生なむるの義ぎ取とり。別わかれのぞと

法流山本國寺 上総 宮谷

開基 佛眼院日純

普門院日廣

靜明院日柔

本通院日遠

推律師 兼徳院日乘

啓運院日要

宝塔院日俊

徳善院日迂

精進院日英

庄屋涙を掩ふていそく吾老たり即死せし葬

ハハカガまぶる。高祖則紙を以て四幡を造ら

め。本化の四大士を書しこれより命とて

曰く汝を終り臨む是をりつて導師とす

べし。治郎助寺を建て藤。宇都宮に至て君嶋某

が許し居玉ふ其祖母歸依甚篤し法号と妙金

と授く城主下野守景綱。景綱ハ長宮氏宇都宮

の姉まゝく教化を受く法号と妙正とよ玉ふ。

信了院日延
壽遠院日淨

法輪山妙經寺 上総 沼田

開基 十四世 寛永十三年正月日乾
本門寺日映

長源院日弘

正統院日尚

壽遠院日淨

洵玄院日透

法雲山遠活寺 上総 細草

総州澳津の人佐久間重貞法華堂を修し。廣栄

院寺とりつて高祖を請ふ則ゆと玉ひて。数日

說法し玉ふ佐久間氏家奉て受戒し其子某か

よび弟某も祝髮し日保日家これなり。保日

日保日家中老僧

○同三丙寅年(御年 四十五)正月法華題目抄を著し

玉ふ六日書成て伯母におくらま。りつて其台

宗と執後さると諭し玉ふ二月朔日泥降九月

續書田邊一代訓會 三十四

因基
本願寺
二十世
智泉院日達
勇猛院日秀

信入院日崇

富木氏台徒了性と法義を論じ了性屈す富木氏書を奉じてこれを告十月朔日御返書あり。

○同四丁卯年(御年四十六)八月十五日母堂逝す。

高祖計をまゝ衰毀殊に甚し十一月廿四日天台會をまゝくこれより年々常と成十二月五日。

総州星名五郎の書を復し玉ふこのと総州笠森よゆき。

笠森よゆき。笠森へ垣見 観音堂よ宿し玉ふ其隣邑墨田村。

墨田村の垣。高橋五郎時光といふ者あり。

○
祖師并先師之花押

吾祖の花押の文

字いふをる文字

といふこと得しけ

がねや或先師の書

物ほの梵字と云

九山八海を表し

論

いふて定め難

全く茲に著す

あり。其夜の夢に觀世音現して曰く吾高僧と

得たり。汝請てこれを饗せよ。夜明て五郎笠

森よ詣るに果して高祖よ逢ふ。則御供してか

つり。其勝縁と結ぶとよろこぶ。其地よ寺を創

す。庭谷山妙。藻原の邑主齋藤兼綱一字と構へ

常在山妙光。高祖を請待して檀越となる。高祖

寺と号し。野呂ふゆき玉ふ館主曾谷直秀歸依す。若官小

ゆき玉ひ富木氏の子祝髪は日頂こまなる

と云ふ

高祖時ふよりて思

設ふことありて書

換ふと集りあり

悉く知識を値て

諦めよふなり

○最初ハ妙の字

を用ひる

ゆ

六老僧の第五伊藤阿闍梨と称す。真間山法寺の開基あり。

○文永五戊辰年(御年四十)閏正月十八日高麗の

起居舎人潘阜等蒙古の書と齎て來る蓋し我

朝の貢をもとむ。官議して其詞の非礼成を以

て其書と報せ。四月五日高祖書と法監小與

へ玉ふ。五月八日兩日並び出八月廿一日書と

宿屋入道光則も寄ていらく去る正嘉元年八

月廿三日の大地震の時諸經を引て考るに。

伊豆伊東梶取九歳

一授與一々の國の

字少く天竺漢土

本朝三國の

表示ある

べーや

○この佛勅の二字

ありて吉田兼益

ゆ

ゆ

念佛と禅宗とを歸依ある故に日本守護諸天善神のいかりをなしておこる所のよしとありあり。

若此退治なくば他國のたれに此國を破らる

べしとてこれ勸文一通をえりて止元二年七

月十六日御邊に付て故最明寺入道殿に進覽

と其後九年とるたり。今年蒙古國の牒狀之

れあるより風聞と經文のこととくハかの國より

此國を責む事必定あり。志あるに日本國中より

○州の字



○佐渡流罪免許
の後ハ久成の二字

○造

○王



○弘安三年己未の
御本尊ハ佛滅度

日蓮一人彼西戎を調伏せざるの也と。かひて

これを君の為國の為神のた免佛のた内奏

を辱るるべしと云々。光則報せし。十月十日

書と執權時宗に献じ。まつて諸宗の僧侶と法

門の是非と。公邊に論せん事を請ふ。其他書を

寄る事。細素凡十ヶ所。これ安國論の識文。たぐ

はざるふよつてなり。まゝ書と門人よ手つて。

あれと論じ。故執權奥州義時からて安藤五郎

某と奥の津輕に居らしめ。蝦夷に備ふ。此より

蝦夷をむひて。五郎を殺す。高祖曰く。蒙古まゝ

に來らんとす。東夷もまゝをむく。あやむい哉。

○同六己巳年(御年四十八)二月廿一日。月三ツ並ひ

出づ。十二月八日。安國論の後。書し玉ふ。此年

甲州吉田よゆき玉ひ。吉田ハ都留郡にあり。後

手書の妙經一本を富士嶽の半腹に埋て。以て

後世流布の地となし。人其処を經が嵩とす。

後二千二百三十余

年と記し玉ふ。此時

の花押ハ薩多羅

摩芬陀梨伽蘇多

覽と窺奉るなり

所謂薩との妙梵

字ハ孤あり達摩

法あり梵字ハ

瓜芬陀梨ハ蓮

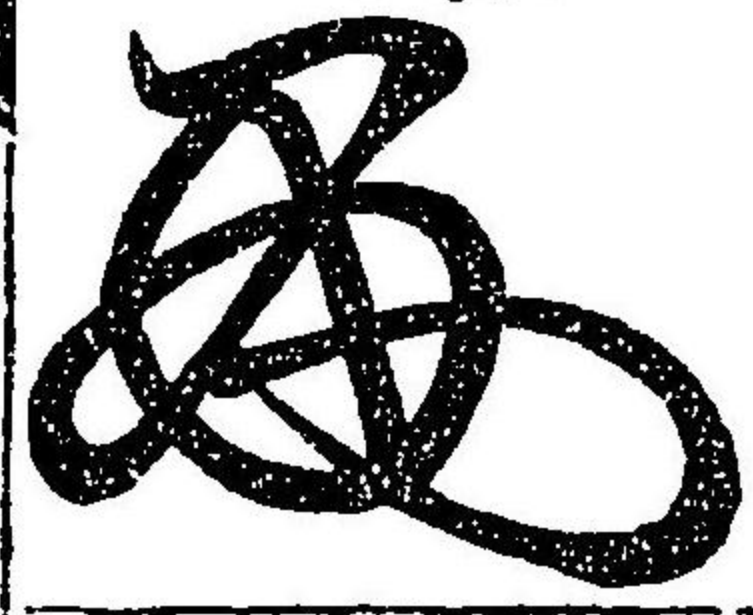
伽ハ華あり經を

蘇多覽といふ則
本尊の全体法華
經の心魂あり依て
御判の書



中よいねて芬陀
梨あり伽の華にて
散花のかたち故
こくかたごど一
尊ハ經じて獲多
覽あり猶後覽の
知識正し玉(か)

日昭



高祖
廿八人
本尊を
手へる

高祖御歸路小立村を過玉ふ。木立村ハ都留郡
を建蓮花山妙
湖寺と号す
本尊を乞ふの廿八人す
書してこれを奉へ玉ふ去て勝沼北原田波黒

川よ遊化し玉ふ更よ相州板橋よ至て象鼻石
の上よ憩てさり玉ふ。九老僧朗慶一字と象鼻石
の側よ建て象鼻山妙福寺号す

蒙古國の使黑的書をりせせ對州よ来る官
對州の人よ命トてふまを拒し黑的塔次郎
弥次郎といふものをとろへて歸る。

号常在院

日興

日興

日興

日興

裁し書を併せてこれに應じ玉ふ。この夏大に
 旱し。六月十八日。官より。極樂寺良觀に命じて。
 雨を祈しむ。高祖これを聞て。其徒入沢某周防
 某入沢某周防入道道淨。謂て曰。吾頃歳良觀上人
 周防某周防房より。と。法門相競請ふ法季を藉てりつて雌雄を決
 せん。若上人の法季。七日にして雨ふらん。吾宗
 教妄誕あらん。雨ふらざるべ。上人の持律妄誕
 ならん。二子以て良觀よ告良觀喜て。百餘輩と

号安立院

日向

日向

日向

たまを祈る。五日ふして驗なき。更ニ多宝寺の
 僧数百人を招集め。いよく益これをほとむ。其
 期満て雨ふらば高祖使をつらひし。これを責
 て曰。和泉式部といひし色好の女一首の哥を
 雨を降は
 ふらば。日のもとるれを。でるそりし。
 ふらば。めやる。阿光がまたに。
 ま。能因法師と申せし破戒の僧も。綺語の詞

日向

日向

藻原介宝

をりつて雨をふらば

天河苗代水よ。せまきをせせ。

わまぐぐりまは。神なる神。

上人の行法。なんぞかきよあつらるや。なす

小雨をら猶あつらる事を得。いんや後世の

大事よ。ためてせやと。いんにおいて高祖。つから

御弟子二三輩と。靈山が崎よ出。靈山崎の鎌倉志

呪を誦。題目をと。なへ。經文を薄板よ書して

号本國院

日頂

日頂

りつて海よ投。玉ふ時に天候。曇り。雨車軸

を流すがごとく。人。以て奇あり。僧の行敏

といふ者あり。浄光明寺。七月八日書を寄て宗教

を問ふ。十二日四條氏母の忌辰。逢ふ。供物を

高祖よ。献上。獲福を請ふ。且孟蘭盆と施餓鬼を

の事を問ふ。十三日行敏。報じて曰く。私。問

答論難をな。以事。吾欲せざるあり。やむ事か

くんむよ。くこれ。を官。告げ。後。公庭よ

号本應院

日持

妙覺寺の本尊
上慈園奥津
富士山本門寺
宝什

頭書田...

於て辨断をべし。廿二日行敏疑問を書きて官
ふろつたふ良觀が書副を。他日入澤其書を
得てこれを高祖に進め。且その書に答へしむ。
高祖あまよよつて其人を化さんと欲し。具
辨釈を記して。以て其意を答ふ。行敏これを讀
て。膝をけして嘆息を。復詰る事能はば則良
觀等と議して公邊に諷して。いづく日蓮重時公
時頼公を以て。隨獄の人とほ。又建長寺極樂寺

日家

中老僧之内

曲

同

日源

あ

等を焚諸僧を斬これを梟せよといふ。皆暴悪
の甚しきあり。これともまのぶべくんば孰と忍
づうらうらんなや。其他の諛人極なし。或ハ夫人尼
公よ。阿一さまはいつ。八月廿日公廳へ。高祖を召
し。諸僧の訴る所を問ふ。高祖曰く。信よあり。
但し二公をりつて。隨獄人となる事ハ。其在
世の時より既しこれをいふ。何ぞたゞに今日のこ
ならんや。凡吾申所ハ。國家の為に。謗法罪を

日源

如

日源

及

除かんを欲まなんぞ然らざる事を得んも一
諛を信し吾を罪せば則必國を去れ。後異賊來
りて攻る事ありん。これ即藥師經大集經の説
あり。悔るとも何ぞ及ぶん。廿二日安國論を以て。
執權の家臣平の頼綱は示し且書を作り其説
を宣てこれを諭し玉ふ。官議して曰日蓮事を
佛法に託して國家を乱さんとほ罪まことに死
よあこわり。九月十二日。執權時宗其宰頼綱を

三位公

日

進

中老僧内

日高

如

日高

如

して兵數百人を率ひ高祖の室を圍まむ。高
祖曰く。日蓮が國に於る譬へば家柱のある
が如し。これを倒さば國をれいん頼綱及び
諸卒色を作して罵從者少輔といふ者あり。妙
經第五軸を以て。高祖の面を打事三たび。諸卒
騒亂して九軸三藏も皆引ちたり。すまはち
高祖とさくして馬に上らめ押ゆ。平朝直
の所を在りむ。朝直は武藏且日朗等六人を地牢

日蓮一代記四卷

中老僧之内

日傳 貝

同

日傳 神

同

日保 鳳

小囚へて。夜まゝに高祖を龍口より斬んとす。若宮ふいたる。高祖馬より下て。鶴岡の宮より向て告訴へ玉ふ。由井の濱に至て馬を駐め。使を四條氏よりつうぐ。四條氏ハ中務三郎左門頼基と稱し江馬殿の醫官あり。永く別々人事と告玉ふ。四條氏同胞四人偕ふ來てこれを送る。殉死の志あり。爰小老婆あり。餅を盆よのせきたり。悲し泣てこれと供じ。高祖愍てこれと受玉ふ時已に曉方あり。依智

同 日 舟 同
 同 日 祐 同
 日 賢



老婆高祖よ
 餅を
 供じ
 図

中老僧之内

日位 蓮

同 日秀 馬

同 日行 如

高祖 竟多 御之 難老 の 因



九老僧之内

日竹 軌

同 日像 角



頭書日蓮一代記區繪

〇四四

直重

日像

日像

直重刀を執て。まさし高祖を斬んとしけるに。
 たちまち刀折て休る。時、東南より光り有て
 月の如し。皎々として法場とてし。諸卒ふる
 ひおのゝそ。或は走り。あるひは倒る。あの時、當て。
 執權の屋敷怪と事あり。星地は隕虚空は聲あ
 つていやく。誤て聖者を喪り。國亡ん事近から
 ん時宗大は驚く。使をつりて高祖とゆるす。
 使者急で龍口よゆく。龍口の腰越村は属其地精
 舎を建て寂光山龍口寺と云

日像 龍
 日像 石
 日像 龍



七里ヶ濱
 行逢の図

七里ヶ濱

行逢の図

正中山

日常

谷中妙法寺藏

日常

日常

御下知之趣

一 於 守殿御館大物恠氏有之日蓮法師不可
誅之由以南條七郎被 仰出所如件

九月十二日

信濃判官入道

親正

平左衛門尉殿

龍口よりもまゝ其事と言上り兩使七里が濱
あて相逢ふ。川あり後の人此所を 高祖逸る事と
名づけて行逢といふ

九老僧

日常

同

日常

日常

得て咒を念じ袈裟を松の樹にかけて諸天を
禮してその擁護を報ひ玉へ人其松を呼て
けさかけまつらん十三日早朝に官命して送
る役人等これをまもりて午時本間重連の家
六郎左衛門 至り玉ふ四條氏にまゝに従ふ初更官牒
と稱す 至る守者として事を慎まむ時は空晴なり
高祖庭より歩之誦經一天を仰て宣く法華會上
月天子護持の誓ひあり吾法のため厄は罹る

大学大僧正

妙實

同

題

依智

星降

の因



久遠成院

日親

御

行学院

日朝

いかんく。と記す大星梅の樹の上は降り忽ち
 變じて童子と成て物語は是すかち明星天
 かり。守者驚く志をくわりて天曇り風有て海
 の音鳴動す。此時受戒する者道俗して百餘人
 かり。十四日夜あけ。十郎某来て曰き。の執權の
 やか怪事あり。陰陽師曰。はま聖者を害する
 の罰あり。國大に乱れん。十五日官命有て高
 祖を佐州に謫す。執權の家老頼綱書を重連に

山城法華宗順持記

本山 堀川通松下町

蓮並座の釈迦多

寶ハ板多の本尊

とソ日静上人の開

眼中尊ハ日助の筆

なり

○おんぶたは第一の

釈尊ハ祖師より朗

師一あつと與へ玉ふ

ほろろとて曰く重連の佐日蓮の謫居足下よく

これをまもるは数年あつてまことに赦歸せ

んとは若不諱の事わらば罪足下より帰せん願

くばこれを慎め。廿一日書と四條氏より玉ふ其略

小曰く足下かつて法華經の為のゆへに竜口

小於て吾と死を同どうせむと欲と。これ自裁

して主より報るより堅く吾今佐州より謫せ

るるといへども何ぞ畏るふたゞん月精已

尊像なり

○生御影の祖師

うしちに祖師自

筆の題目と御判

あり又朗師の書判

もつり又ぬけの御

影ハ日静上人の作

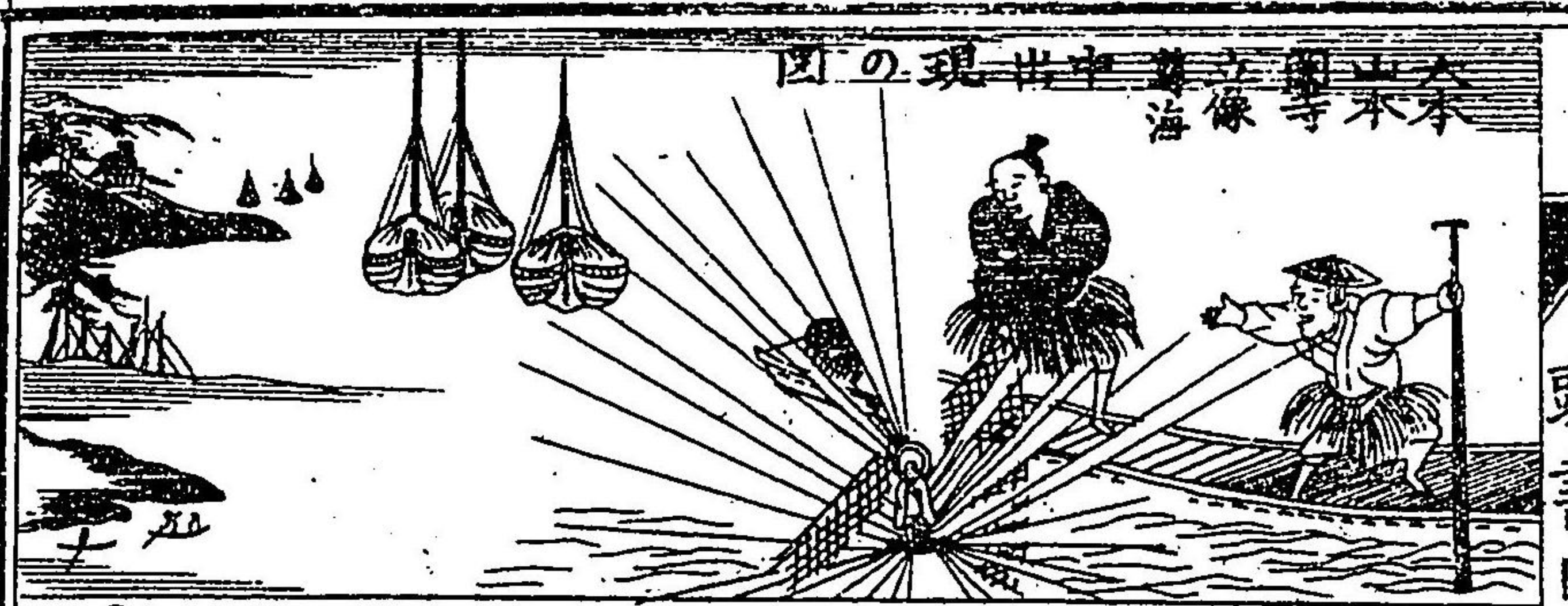
○開運大黒天ハ祖

師の作宗旨御建

立殿中間答利還



朗師の書判



本寺尊像出世の現図

龍口小現のき明星依智の降る豈日輪の護り
 なるらんや請ふおもひとなす事ありき十月
 九日寶塔偈の口訣を記し書を併せて日朗の
 阿とく十日は疾く玉ふ富木氏妙一尼妙一尼ハ時昭の母ニ
 おのく人夫を遣り従ひしむ武州久米川は米久
 川ハ入間郡あり宿して阿くる日新倉に至り玉ふ時
 新曾の城主墨田時光其妻の難産あるを以て
 高祖を請ふ蓋し夢と感する事有なり高祖行

の尊像なり毎月
 きの子参詣多し
 一朗師の尊像眼
 病の人信心して利
 益をうけんと其數
 をあらしむ
 一妙法華院の額
 水戸黄門光園卿の
 御筆にてとんをた
 勅賜備武兼文絶

至とすし路の側の社に留て祈念したまふ
 立ち立どころに效あり後小精舎を建て 十三日見玉
 小至り見玉時國六右五門と称す の家に宿し玉ふ十四
 下野の粟津ふいたり長谷川某の宅を過玉ふ
長谷川某長源と称す後精舎を建て常栄山長源寺と号す 廿一日越後寺泊小至り
 石河吉廣其家小迎へ奉る石河吉廣右五門と称す精舎を建立し聖真山法橋寺と号す
 高祖のうらにわけて富木の人夫を鎌倉小
 かへし玉ふ因て書を富木氏に与へ玉ふ廿七日

頭書日蓮一什詩因縁

五十五

名士とあり

○祈願石方丈の庭

小あり

一忍不し石六寺内

真如院あり

の生相十羅刹女の

舍利御ア人一等の

靈寶多し

一清正公利やと

受一人かおびてし

纜ととく風悪くして舟角田山下小泊る。角田

浦原郡あり寺あり童子忽然として見れていやく

角田山妙光寺といふ童子忽然として見れていやく

山の窟中に七頭の蛇ありて人を害は願くハ

師の法力をりつておまを伏せよ高祖山上

まて小石を拾ひ石ごとに經の一字を書て投

トたまふ其害をまのち止む時に八幡の示現

あり高祖經題を巖の上よ書してまつて供は

黒土痕巖小透る人呼で巖の題目といは廿八日順風

本園寺末 慈雲寺 本ノ町

○鬼子母神傳教

大師の作あり

本園寺末 妙孝寺 同

祖師鎌倉松葉

谷少て常に禮誦

玉ひり釈尊まはせ

妙覺寺末 同 蓮久寺 同

一像師真筆の四

面題目の石塔あり



浪
題
の
目

むかひ松屋妙蓮

いふ人の身代りにあり

利益とわらふ玉ふ

勝光寺 身延山末 同

○身延山の神像

一木同作の七面の

尊像 まじはる

○願満の祖師とて

ありかき尊像と

長國寺 本國寺末 同

を得纜を解く。かぜ俄に悪く赤衣青衣の童子

二人きたり。舟子に命じて曰く。これを勉よと。

須臾にして波穩あり。高祖棹を水面よりぐじ。

大に經願を書玉ふに。字の象波み浮み自から

竜蛇の勢あり。人呼で波の顛目といふ。舟佐州

松寄に至る。岸に上て進み玉ふ。石有經願を書

してもつて廣宣流布の表をおび。更に進みて

大樹の下に憩へり。則童子来り見へ其里の松

○祖師の尊像、武州

新曾の城主隅田五郎

時光の作して祖師自ら

開眼の尊像ありしを

に題目なりび祖師

の御名判かり安産を

守り玉ふと云ふ

妙亮寺 本國寺末 十八丁

此寺と本國寺本満

寺と三朗寺といふ

前の祠に宿らしゆんと請ふ。松前の祠高祖の命

因て本尊を受く。蓋し其神の化せる所あり。あ

くる日。小倉ふゆき。祝氏某が宅を

過く新徳に往て宿す。十一月朔日大野よ

いたる。塚原に小堂あれども人曾てな

し。高祖すまのちこれに居し玉ふ。後小塚原根

兩雪稍多くして寒氣肌を犯すといへども高祖

はこころも平生お替り玉り比州の闍提輩高祖

頁書目録一ノヤノ内論 〇五十二

○天王寺屋淨本自寺

一三面の大黒天傳教

大師の作あり

一春日大神天智天皇

の御作

△ 三寺寺末 西京本願寺

十如寺 十如寺十子

○法華堂の白跡の祖

師像師の作像師書

たまふ石塔あり

を惡む事甚し時に遠藤為盛といふ者あり

姓ハ藤原 弥陀を尊信して淨土の僧のごとく人

稱して阿佛房といふ妻を千日尼といふその里

西の方高祖の謫居小近し新保と稱しこの月

夫妻相携て来り謁し聞法感發して帰依た

なり且闡提輩高祖如むを憚て毎夜深更

速で自來り膳を供じ高祖これを感じたまふ

然して僧の唯阿生喻等土俗凡て數百人相謀

妙蓮寺末 御前通下條

省清寺 十如寺十子

○祖師日法上人の刻

玉尊像あり祖

師より題目と年号

と御名判を書き中

尊ハ祖師の御真筆

あり其外靈宝寺

多し近頃講中を

結びて恭詣絶へば

大に隆盛あり

阿佛房 十日尼

高祖の 謫居を 訪ふ



阿佛房 十日尼 高祖の 謫居を 訪ふ

池上末
法華寺 同

○法華堂の旧跡あり

○大覚大僧正兩の祈り

成就し玉ひし時天子

より賜るところの三菩

薩号の御了ん並に

大覚大僧正任官の御

了んあり。當寺の縁

起元政上人自筆州

山集小をまびらり此外

て高祖を害せんとす。吏長重連曰。衆若彼宗化

をまつて非となさば。よろしく詰問して。あて

おれを屈すべし。何ぞちからを以て争ふ事を

せん。衆るくにおめて退く。すあわち其徒を諸

州よはのり。高祖を云つめん事を謀る。

○文永九壬申年(御年五十二)正月十六日。越後信濃

陸奥出羽諸州の僧をひきたり。唯阿生喻等

大野に會し。かろくぐあんめんを。高祖辨折懸

吳密おわ

五沢赤 立本寺ま内前

妙榮寺 法住ま内丁

二三條小銀治宗近の

うちし密劍と稻荷大神

と勧請を利益をあらは

あわ

立本寺 内野二番丁

○鬼子母神十羅刹女ハ

まいけん新々像師の

閑暇なる祖師の尊像

河のごとく。諸僧口をづむ。あくにあめて或ハ

ろろ酔て。化に帰るるものあり。或ハますく

瞋恚を誘はる者あり。重連才を座に在て。其非

常と譏察す。高祖顧み玉ひて言く。近日鎌倉不

軍あらん苟も禄を食ひの勤さるべけんや。子

進奈せよ。重連意よこれとあやむ。十七日浄

土の僧辨成。弁成ハ印生。来つて問答を請ふ。高祖

のたまふ。止む事あるべし。あひら筆研と以て

ハカぶとの御影と号す

○祖師堂の南に像師

御真筆の石塔あり

照宮寺 内野有命寺

○六老僧日昭上人の旧

跡ありの像師御作の

高祖師 上人

本昌寺 出水本西へ

○祖師八中山日常大

の作より祖師より開

せよ辨成すから書するに三問をりつてす。

高祖答釈一玉と辨成屈伏して志りぞく。二月

朔日台徒最達來て門人となる日淨これ也。

執権時宗の兄六波羅時輔及は。時輔ハ時頼の

稱十一日かまくら騷動は十五日執権時宗の

一族義宗とて六波羅を伐む。六のときさ

當て天下の名士多く討る去年高祖官において

陳るところの其一災すべにおこる時宗爰か

し玉と尊像あり

華光寺 東山本西へ

○毘沙門天の尊像鞍

馬の像と向木同作なり

妙圓寺 小本寺西へ

妙徳寺 下長者町本西へ

○毘沙門天の傳教大

師の御作尊氏將軍の

守本尊。妙見尊利

ぞねあり

おのて悔悟して日朗等とてり鎌倉急と佐

州ははぐ重連が族擧て高祖小詣で合掌礼持

いていづく。さきに師の吾を諭せる語今すかに

おもひ當れり念佛無間も又かあはれ虚あり。

異賊の來らん事も又あらん。この月開日鈿と

あらん。四條氏小示したまふ。四月七日居を石

田の郷一の谷ふつ一玉ふ。一谷ハ雜太

半に本門戒を唱て最達を授たまふ。十五日受

頁書日蓮一代記卷一 五十五

愛染寺

△
 本満寺本
 愛染寺 中實寺本角
 一 愛染明王傳教大師
 の作るゝ鬼子母神
 日常上人の作れいげん
 わくくろり
 本圓寺本
 惠光寺 海福寺本元
 〇 感應あつくなる七
 面天の尊像あつ朝
 上人の作目審上人の感
 得あり

職法門ある此月一の谷の庄屋次郎某をして
 高祖を守らむ。次郎おりへらく余いま嘗て
 弘法のため此嶋に流さるゝものある事をき
 かば然して獨若き高祖あり奇といふべし。恭
 敬ことに厚し。その子中與某 中與某名の信重 十郎と稱し 尤
 高祖を信し遂に檀越となる。高祖の居玉ふ
 所其東一里許にして松樹あり。誠に偃蓋に
 て愛まむべし。高祖その下ふつめて水とをとり



日備上人一法難

玉ふ。水おのづから涌りて多り。とてく是を
 汲て手あゝひ口すゝむ。誦經志玉ひあるひハ
 袈裟と脱其松よのけて法運長久を祝ふ。あ
 其松還衣と稱は相模 あつ
 國ふあるものと名を同ふ。然して闡提輩妬忌事まず
 くまなむ。則其州守朝直かまらるゝに告て
 いりく。日蓮ひそかよ國家を咒詛は。いまこれを
 除すんば必らば後の害あらんと説す。朝直の
 役人に命じて曰志むらくかまに親むものを

東一法難 日備上人

○弘通所と云々
功能奇妙あり

立本寺立本寺赤
燈明寺立本寺赤

○釈迦多宝の運慶の

作中尊の像師の筆

○像師御真筆の石塔

あり

妙頭寺妙頭寺赤
感應寺富土本門寺赤

上行寺富土本門寺赤

三會寺妙頭寺赤

禁ぜしむ。つてにのりて。帰依のともがらを捉へて

これを罰せし。州郡大に騒動を。密徒一位閻梨改

宗して親く伏す。日静これなり。すあわち次郎

の弟なり。かまうに。孀婦有。五月見をたづむ。

千里を遠しとせびし。来り訪ふ。高祖これを

慰勞し玉ふ。廿五日言をつくり。その旅舎を送

り。法号を命じて日妙とす。七月廿一日前より

あつりすところの。真言修法を日昭等よおつ

○開山日這上人讀經二

万六千部説法三千余座

をりて開眼し玉ふ七面

天の尊像あり

妙満寺妙満寺赤
壽量寺通千本西入

○鬼子母神の傳教大師

の御作なり

榮壽庵高は

本久寺大も町

一 大黒天の傳教大師の

玉ひ書割あり。これと一八宗異目をあらわし

たす。鎌倉の信女その夫を托して高祖を

問ふ。高祖これよ言を給ふ。誦經の時少女あり。

来り座してこまをこま。高祖の曰く。女何人

ぞ。女のいそく。嚴島の女なり。福がわく。塔中付

囁の本尊を多ま。高祖曰く。貧にして紙も乏

女すあわち。桂を脱いでいそく。これよ書給へと

いよ。高祖則書其かたりに授與嚴島女の

作あり

本隆寺ホトケ 大まろ町

真浄寺マコト かんきじ

玉淵寺タマノ あまひら

一中山イツナカの生御影ナマミカゲと

本瑞寺ホンズイ

真如庵マニョ

了権寺リョケン

知足庵チクソク

圓成庵エンセイ

北栂町五辻

同

同

同

同

同

同

同

同

一関イツセキ運妙ウンミョウ見尊ミミミ八祖師ハソウジの

御作ミナマ像師ゾウジの感得カントクあり

大黒天オオクロテン傳教デンキョウ大師ダイシの御

作サシ。鬼子キコ母神ハハノカミ八日ヤツヒ親

上人ウパの作あり

光悦寺ミツエツ

此寺ココノテハ太虚タイキョ巷キョウといひ

し所ところを本阿弥ホンアミ光悦ミツエツの

位イ牌パイあり

常照寺ジョウショウ

同檀林ドウタンリン



五字ゴジあり。女急メノキよとと去さる。其女メノメの字ナリ横ヨコの一畫イチカク

をひく事コト一幅イチブも亘わたる。その本尊ホンソン今イマよりりて

藝州エチウ嚴島イジマのやうにむむとらふ

○同十癸酉年トウジュウスイウネン（御年ミトシ）正月トウジツ廿八日ニヤツハチニチ書シをりて

最蓮サイレン所業ショゴウを問とふに答こたへ玉ふ。よつて先ま著ある

祈禱イノチ經キョウおよび祈禱イノチ告文コクモンをあのせて是これを贈くり

玉ふ。二月ニゲツ佛法ブツポフ血脈ケツマクをあらわし玉ふ。十五日イツニチ書シ

なる。四月シゲツ觀心カンシン本尊ホンソン鈔ショウを著ある玉ふ。廿五日ニヤツイツニチ書シ

○開山八身延日乾上人
此山成実の灵山と尊

き其地あり

○祿内外祖書同啓蒙

法華經啓運鈔其他藏

板書おかし

妙覺寺

新町頭ぐま口
だまんとすてす

○祖師朗師像師の尊

像ハ天下無二の其像

○西佛の石塔ハ祖師の

成て。太田うららうよ玉ふ。五月廿八日。義浄に

田書してつて。その法えんを問ふまあてん

玉ふ。この月。如説修行をあらう。玉ふ。四條氏

来り訪ふ。閏六月十一日。顯佛未來記をりか

玉ふ。七月八日。十界勸請の本尊と書せらる。實

よあま。本化大曼荼羅の最先あり。賛よいつく。

佛滅度後二千二百廿餘年の間。一閻浮提の内

未曾有の大曼荼羅あり。南部氏書と呈は行者

御作此外其佛秘密

おかし

本要寺

常徳寺末
本法寺前
妙処しかニテヨ

水法寺

小川寺の内
えまじ向

○開山日親大上人一条

おどろ橋まで説法し玉

ひし高座石ある来現

の大黒天又開運の摩

利支天等をいかり至て

おかし

厄は懼るを疑問は。八月三日。答書を賜ひて惑

を解く。九月十九日書と作て日昭の母よ子つ。

其信力を称歎し玉ふ。佐州の大守朝直良觀が

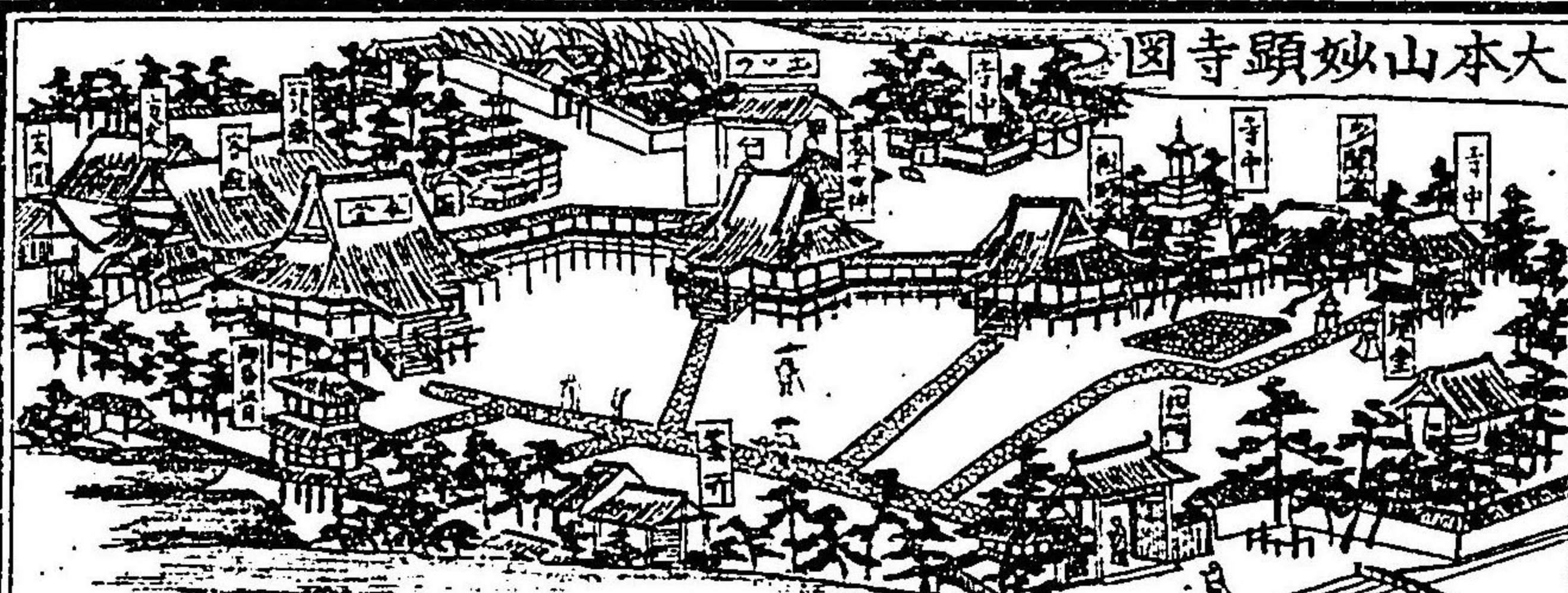
諛を信して。十二月牒を其臣重連に下して再

び請居に親とよる者と禁び。このう。當體義

を著し玉ふ。書を併せて最蓮に示し玉ふ。又宗

教一冊。祈禱の事の言物二冊を著し玉ふ。日與

日向来り訪ふ。高祖命とて浄土の僧印生に詰



問せしむ。印生屈之其後高祖說法する時、當て尼来て座より有。志むく問難を發す。高祖覺て曰く、汝ハ嚮より屈をうくる。印生が為よさなるならん。猶摩揭陀國の摩沓婆が妻瞿那末底菩薩より於るが如し、速に執心を轉ぜよ。尼首をたれて退く。會中これを知る者ありて曰、印生が梵嫂ありといふ。蒙古趙良弼太宰府より。具よ本邦君臣爵号州郡の名教風俗土宜を記

大本山 妙頭寺

寺の西野に在りて、大正二年に建立せられたる。

○四海唱導の額、近衛三貌院の御筆、○宝塔中の西尊三菩薩の御真骨、御真筆、御アノ一寺、冥

宿数多かり、當山、尊如覚寺、八祖師立本寺、ハ

士羅刹女像師より御相、美ありて三野分ちける

吳像あり、弘長元年、朗

してかへる

○同十一甲戌年(御年五十三)正月十四日、行者難よ

あふ事と記し、門人よ示し玉ふ。二月五日、二の

明星東方に並出る八日の夜、執権時宗夢に赤

衣の童子有て、なんぞ日蓮と赦さるやと。三度

よふ家老頼綱もまゝ。青衣の童子と夢し、其語

符節を合たるがぶ。是より於て君臣相語て

恐懼を遂に高祖を赦す。十四日、赦免状を以て。

師の刻玉ふ祖師の御作
 又の祖師も火よけの祖
 師とも稱し奉る鬼母
 母神傳教大師の御作
 祖師の御開眼吉田兼益
 公の御感得なり
 妙蓮寺 寺の西谷豊良
 大覚大僧正雨のいのち
 時好玉ひまきまごころ
 本隆寺 智光院
 寺の西谷豊良

日朗は授く。十五日高祖灌頂口傳を著し玉ふ。
 三月七日日朗佐州小木濱に至る。性善が房に
 宿す。のくる日。性善尙導して新町に至り別る
 日朗後の山 新町後山を過て日暮ぬ旅づる
 れ甚しく坂險阻少く且飢なり。ゆかんと欲
 する事か。謫所を去る事数里石小倚色を
 勵し日朗赦免状を奉じて来ると。三たび呼ぶ。
 至誠感ざる所色遠く徹し

○祖師の像師の御作
 ○題目の石塔の像師の
 お筆。名水井あり
 瑞龍寺 本寺に七丁目
 開山瑞龍院妙惠日秀
 尊儀。豊臣大閣秀吉
 公の御姉あり。例月十二
 日説教ありといふ灵物お
 びたしあり
 本満寺 寺町全由川上ル
 寺の西谷豊良



高祖の謫所
 日朗赦免状を奉じて

旧村雲御所
瑞龍寺
之園



時に經を誦せらる。これを聞たまひて曰く。孝
なるりか日朗山海千里志むく謫居を問ふ。今
まゝ来る侍者日與をして出迎へしむ。日與急
に炬火を把出てこれを迎ふ。日與乃ち扶持し
て歸る。
土人の所を日朗坂といひ石を赦免といふ。九
老僧日行梵宇を創し日朗山本光寺と号し
赦免状寫 涼都本園寺の
靈寶

日蓮法師御勘氣事所被免許候也

文永十一年二月十四日

行兼

清長
行平
光經

藤左衛門入道殿

前司状寫 右小
同ト

日蓮法師御勘氣事有御免許之由所被
仰下也早可被赦免之由候也仍而執達如件

文永十一年二月十四日 兵部丞行兼

山城兵衛入道殿

高祖の尊像洛北芥
生の里より出現し玉讀
經の御影と稱し奉り
祖師感得の鬼子母神
の尊像よりあひの能
勢写の妙見尊あり
本禪寺 寺町今出川下
本寺下十丁
釈尊の海中より出現
し玉ふ冥像にて火中
不焼の尊像なり

妙満寺 寺町二条下ル

○冥寄あまのつりりの道

成寺の鐘此寺にあり

三十三枚つき祖師の御

真筆ありの中川の井と

以名水あり

本能寺 寺町御池上ル

○冥宝あひまじの近頃

東山の自雲冥神とて

にうらまの信長公のま

これより先高祖白頭の鳥を見て曰くむら

燕丹が秦の始皇ふとらひまじとて。始皇鳥の

頭白くならんとき。汝を本國よかへびごと

ありけとて。燕丹天ふあふと。是を祈りて小頭の

白く鳥来りたり。我朝よも増基法師。紀伊國

音なり川あて

山がらび。うらも白くならにあり。

ワづかえるべき。とひや来ぬる

あり

妙満寺 南東洞院

久遠寺 あまのつりり

善立寺 同

本蔵寺 堀川仏光寺

一當寺泊勅願所

ばんど二道院日法上人

其を開き玉ふ寺あり

天拜の鬼子母神祖師の

尊像の冥寄敷を

○經王祈禱處の額

とよみたりあり。これ吾帰るべきの兆

なりと果てあり。十二日書と遠藤某よ

玉ふ十三日諸徒よ別る。路法手より

浦の津に抵て信宿し玉ふ。十五日纜を解く舟

越後の拍崎に抵る。其地番神の祠あり

り。高祖靈感ありて。祠に就て勸請をこれより

府中へ宿し玉ふ。府中へ今市町と

川あり。磔を拾

呪を書きし事。石毎に一字あり。かつそ水難を

天元皇帝の御宸筆

本行寺末 御宸筆

本光寺 御宸筆

一祖師の墨深の尊像

大佛師良運の作

壽延寺 松原通光

一大黒天の傳教大師の

お作の妙見尊像は

頂妙寺 佐内通川

二天門の兩尊東持

いのる。其地稍富り人味で 高祖去んとして玉ふよ。

小山伏来りむかへて。履を其居に枉ん事を請

ふ。高祖これを許し彼小山伏日朗日與二人の

擔ふ所の袂色を取て進む旁の梵刹に入る。高

祖隨ひ入て。其主小問ふ主辞色怪る事あり。寺

へ則真言宗よして殿多聞天の朔像を安置

す。高祖熟々これを眎たまへ面相小山伏と相

同。其前にふくさ有足塗泥附く主もま

國天西の毘沙門天運慶

と快慶と師弟の兩作

○今流行する所の頂妙寺

板訓点付法華經并中

正論其他藏板あり

法性寺 本國寺末

○鎌倉御猿島を引移

たる灵地あり

瑞光寺末 東田中村

浄妙庵 寺末

一開山日亮上人清淨真

以て奇ありと以則ち高祖を延てこれを饗食は

主の名ハ吉祥改宗受戒して日朝といふ。高祖

本尊と書してこれをよへ玉ふ。信州を過き。一

村小宿り玉ふに。佐野某檀越とをる。武州児玉

小抵り。久米氏小宿して供養を受玉ふ。近村の

婦人難産を患ふ。其夫関某御祈禱を請ふ時傍

小飯釜あり。則ち把て本尊と其面よ書し。是を

あへ玉ふ。婦人戴バ則ち安産に。関氏大士の像

を造て其腹中

頁一ノ...

隱の高僧多し字三礼

て書玉ひし法華經宝塔

中にありのせん法修行の

節の参詣多し

無本寺末

双林寺

立本寺末

妙泉寺

おんだらを書玉ふ

毎年ちり火妙の字ハ

小飯盤を置く東京谷

中瑞輪寺の祖師これあり

門人拜迎して歡ぶ事甚し

見へ玉ふ諸有司座にありて

高祖よりこれを辨折に頼綱

人事づきこの日をや高祖曰く

さば然といへども執權邪を信じ

天の怒る事急ありおしふに必を

護國の御禱ハ真言を用る事あり

廿六日鎌倉小還りたまふ

四月八日往て頼綱

各法門を問ふ

經文の時日を記

正を信ぜむ

歳を踰へば

用ひば則

國亡びん此年春より早に官法印加賀ふ

命にて雨を祈らむこの月法季に

あられども大風木を抜屋を倒し高祖曰く豈

真言修法の咎ならずや時お官命有て曰上人

念佛無間等の法門を止む愛染堂と城門

の西に構へ田一千町を寄附して上人を住せ

しめて國家を護せしむべし高祖曰く若福田

をいのらば國中の謗法を禁断をべし何ぞ吾



松崎 妙田 寺 春 景 園

像師かん杖をてあはせあ
 たり今世もても残し
 玉ふ法の字の西陣燈明
 寺中興日良上人の作り
 玉ふあり
 立本寺末 松崎檀林
 本涌寺 妙光とあり
 〇旧根本檀林おて教
 藏院日生上人の御廟に
 詣で唱題祈願のともが
 り安産の利益を蒙りこ

格言を沮事とせん時宗これを聞ていそく日
 蓮ハ實小大丈夫ある哉此事王府よきこえ五
 月二日護法の牒を賜ふ
 護法状 仙臺孝勝寺の
 靈寶
 頃年教多真法之威力。御感尤深。三國無比
 類妙宗後代難有尊僧何宗比之於日本國
 中宗弘不可有妨者也仍執達如件
 文永十一年五月二日 城左兵衛 奉

と普く入のあるとこみかろ
 立本寺末 同河
 妙圓寺 本心とあり
 〇高祖堂とよみ吳げん
 あらから祖師の尊像
 大黒天すゆ近頃利
 益多く例月きの子奉
 いちあり
 妙覚寺末
 道入寺 妙光とあり
 〇開山道入日長上人樹
 下に宇石上に坐し水に

日蓮大上人

高祖これを受て悦び玉をば官と實し帰依
 して牒を賜ふ。なんぞ三類を禁するあたとを
 憚からん。帰依せばして賜らばこそおれ
 祈るなり。甚しいうか澆季の化し難き事。三た
 びしとて。聽されを逃る。ハ古への道あり。
 五言退かんと遂に南部氏に因て甲州身延山に
 隠栖せんと。十二日鎌倉を發駕し玉ふ酒勺を

入食を絶し玉ふ天げんが

尊の中の中尊の開山の

華なり

道入寺下

正覚院

立本寺末

真淨寺

善正寺

○旧村雲御所の別院と

秀次公の御廟ありの釈

尊、海中出現の灵像

酒内八相州足 駿州竹下車返 竹下車及共よ 在踰へ

其宿する所おのく 供養する者あり 十五日大

宮の旅籠屋に宿る 主人某受戒に由井某も又

来て結縁を十六日 内房と過ぎ玉ふに

老尼あり 供養甚く 懇あり 甲州南部

抵り密寺に宿し玉ふ 寺主法印大輪改宗受戒

は日毒これあり 此邊すこしの流ありて 高祖

御手を洗せられ 御哥遊をなさる

なり 州山集に之区と

満願寺

○旧勅願所にて弘長元年

祖師吉田家神道御傳授

御寄宿の灵地之祖師

東京堀の内妙法寺厄

より祖師分身の尊像に

て灵げん新ありの番神

の灵像ありのこの天神

菅公の御自作例月廿五

手少むすぶ水のあがれのせきしき

たえの御法の念に

此とき櫻の木に御杖つるせられ其御つえを

其所に御さしなされ候へを根付まより此野

を櫻清水といふ 十七日相戻を過ぐ山水清く

秀石小踞して憩ひ玉ふ時に隣里村役人の妻

来て齋食を供ふ 高祖波木井よ入玉ふ南部氏

出むかへて悦ぶ事ありて 精舎を身延山

日奉諸多の天拜の祖師
 大覚大僧正の作のほき
 びきの御消をく當山第一
 の霊室ありの祖師堂の
 額、元改上人の筆の
 地の俊寛僧都の白跡の
 妙傳寺 二茶通東のそと
 二五ノト、ヒト
 〇甲斐身延山とてこの山は
 なるる天地をく関西
 の身延と称すの祖師の御

小經營一奉らんとす。高祖固く辞したまふ。
 故に其居の成所僅小規模と存するのこ。廿四日
 法花取要ある州の小室とす所也。小室ハ巨摩
 修験者あり名と善智といふ法術を以て世よ
 鳴る此月高祖日朗日與二人を従へ往て議論
 善智口と籍む且法力を争ひ勝事ありは
 一々服其居と距事数百歩高祖巨石小跌座
 一々説法一玉ふ此地は蛭多一民家の男女常

真骨法よし又きりり
 の祖師とて尊き天像の
 〇奇特すれ七面天女
 の鎮護一玉ふ
 妙覚寺末 二玉門とあり
 本妙寺 妙下ノ二丁
 一鬼子母神大覚大僧正
 の御作像師の閑眼なり
 〇祖師日朝上人の作
 寂光寺 三玉門通新高
 二東へ入
 本めしん二丁
 妙泉寺 右寺内



高祖善智と
 法力を争ふ

東書日蓮一代評

○そのかゝ山田何う佐渡
 の國でさむの松ふ詰し
 とさふ、さの天夢ふり
 松樹の一節より祖師の
 尊像を感得し守り来
 りて此寺に安置奉
 小刀にて作りたる所を
 もなく真の自然の祖
 像あり
 妙満寺
 本正寺



高祖蛭と
肥いふ
図

要法寺 本寺に三
 一 心庵 三丸坂
 一 心寺とひかりの釈
 尊八行基菩薩の作
 鬼形鬼子母神の恵心
 僧都の作り
 日体寺 松原道康路
 一 祖師の御真骨あり
 一 祖師の像師の御作り

小是を殺と高祖其罪をいまむ皆の蛭人
 の血を吸ふ殺ずんばあるぐり高祖呪咀
 玉へばそのち蛭有としくども人よ害とあま
 其蛭の首ふ一つの黒星ありといふ石和よ至
 り玉ひ川上よて 川上ハ鬼苦 老翁よ逢ふふ
 形容をありて疲たり高祖を其家よ伴ひ奉る
 則宿一玉ふに従容とて語ていそく我鴉を
 養ふとりつて業と此罪の重事とそくくハ

一經王大菩薩八備中高

松村妙教寺の写なり

中山末 日

大漸寺

○妙正神(中山)祐師御

開眼。鬼子母神祐師

の作。祖師(大覚)大徳

の御作あり

妙祐寺

長圓寺

頂妙寺末

青龍寺

免る事を得。師豈意あらんや。高祖法の如

く小諭導。たまふ翁忽焉。て見。凡家を

もま。見失ふ。これ孤獨獄ある事と覺て錫を

留る事三日なり。經文を一石よ一字づつ書し。

川小投。て吊ひ玉ふ翁。ま。て。謝し

て曰。我幸に師の救よ。つて。已よ惡趣を脱る

事と得たり。なんの福。是よ志かん。郡あり精

舎を建て。鴉飼。時。高祖北原と過玉ふ。密寺

一 大黒天八傳教大師御

作

妙満寺末

上行寺

要法寺末

實報寺

通妙寺

一 大黒天八傳教大師の

御作の多門天六運慶の

作あり

本法寺末

本壽寺

一日親大上人の御そり

あり胎藏とらふ。地藏堂の側。石有。高祖教日

座。玉ひて説法。玉ふ。北原(山梨)郡あり。後

て精舎を安國山。金川原。至り。民家。宿。玉ふ。

立正寺と号。主人崇敬。唯法。八代。宿。玉ふ

またま。此里の産婦。孕。生。て死す。その幽冥

あ。ら。ま。て。化導を受く。西。出。る。に。至。て。里人

の供養を受け。日野を過。玉ふ。と。老人。逢。ひ

玉ふ。井を隔て。語る。高祖を請。て。宿。せ。し。む。

なり

妙見堂 同 志保山

今智積院と云ふ

一能勢の尊天安

置利益ちあ

護國寺 山科檀林 妙見堂より

○開山日勇上人冥夢

感一弁才天を山の東北

の角祭り玉ふ

立本寺末 同 志保山

此人後身延山より檀那とあり因て姓を

向井氏と改む高祖の命より玉ふ所あり信州

葛木より遊化し玉ひ葛木ハ諏訪郡あり甲州甘理よりゆき

波木井より及玉ふ六月十七日南部氏の管む所

の新居に移り玉ふ門人日進の父久本房来り

仕ふ日進二人の弟もまゝ難漆す日善日上之

まなり初め高祖より退隠せんとし玉ふ時

諸州の檀越各閑静の地を乞ふみて請す高祖

○釈尊ハ聖徳太子のお

ん作

立本寺末 同 志保山

秀典寺 大まはとあり

一開山秀典日正上人法

華三昧を修し玉ふとき

普賢大士の顕現玉ふ

とろ寺のじろふあり

一鬼子母神ハ像師の御

開眼

妙見寺 山科大塚村 志保山

特し此山を開てつて靈鷲飛來するものと

仕玉ふ誦經觀念十年一日の如し一旦豁然と

して感あり自ら和哥一首を詠し玉ふ

たらわゆる身はうき雲も晴ぬべし

くろえんの御法の就鳥のやまよりせ

おれ讚佛衆の辞あり高祖棄息入無為とい

ふも長く父母を志し玉ふ時々その山上より

陟り故郷の方と瞻望し玉ふ蒙古已に大元と

○妙見尊利益あり

要法寺末 少名植林

本經寺 妙見寺大下

本園寺末 本寺山

法華寺 本寺山

○本園寺のほろ野なり

瑞光寺末 深淵寺比村

養壽庵 妙見寺大下

一元政上人の御母妙種尼

読経礼懺 玉地なり

○釈尊三國傳來のそ

んごとの祖師八元政上

人の開眼の鬼子母神

号以威四海よ加ふ。このう三月大元世祖忽必

烈鳳州の経略史忻都高麗の軍民摠官洪養系立

ふ命して日本を伐つ。十月五日の平且對州府

八幡の祠火燄大よ起る。須臾ふして失は里人

惶怖をかくる時蒙古の両将艘艦九百艘にて

佐須浦よ逼る。六日壹岐對馬の二島及び筑前

肥前を攻む鎮西の兵拒戦て多く敗る大將景

隆資國等戦死を賊軍勝よ乘り里民を虜はし

元政上人の開眼を庵

門の鎮護神なり

身延山末 同

瑞光寺 同

○開山元政上人の御ま

所堂の西南今てつ道の

西あり只竹三竿はり

あじの植玉ふ。釈尊の

廿五條今現在も。元政

板法華經艸山集本化

佛祖統記の外藏板

て帰る高祖曰く。徐前よい。蒙古の東せん事

歳を踰すと。今果して然り。十二月立正意立正

觀を著し玉ふ。十五日皆成ま。本尊と書して

日與小賜ふ。此年房州光日信女書と奉じて其

子弥四郎の死せり事と告ぐ。高祖嘗て一たび

弥四郎を法會所よ見玉ひ。其信士たる事と知

し。め。其計を聞てふ。かく是を惜玉ふ。即弔書

あり。駿州村岡某の妻受戒を。法号を妙圓日義



と賜ふ

○建治元乙亥年

後宇多天皇第九十一主（御年）正月
文永十二年四月廿五日改元（五十四）

廿八日立正觀をりつて最蓮よ志めり玉ふ書

副を二月総州平賀源忠晴子萬壽麻呂をたづ

とて鎌倉小来り日朗よ投じ法子とある日

朗おもへく法器ありて携へ身延山より

高祖一見して曰く他年吾宗を振らんりの必

此子ならん改めて經一麻呂と名づく此時

おちり

一祖師御火葬の灰を

作りたる祖師の尊像の

を

一二月十日開山忌十月

十日宗祖せんがうあま

詣多し

靈光寺

一開祖法身莊嚴院実

傳僧都

年七歳後醍醐天皇の御時後醍醐天皇の御時、肥後阿蘇郡と稱す、日像

是あり、蒙古に礼部侍郎杜世忠等三人書を齎

して太宰府に至る。府これ鎌倉小来る。四月

十六日、中興某来り訪ふ。因て書を其妻よ與へ

玉ふ。五月八日法花の三部をりつて一谷次郎

の妻よ與へ玉ふ。書副に六月撰時鈔を著り

玉ふ。十日書なる。十六日遠藤信士より訪ふ。

廿七日淨蓮其父の十三回の諱辰よ値ふ時服

百一十代目

一像師御火葬の灰を

ねりたる像師の尊像

妙頭寺末
寶塔寺

一當山六神勸請とか

て像師良桂授与の大

曼陀羅あり天下無双

の本尊なり

一像師をたび奉り

天地との山を辰巳の

灵山といふ。寂光堂ハ

を供まじ白業と請ふ。七月二日書を大学三郎

あらし諸宗の教義を諭し玉ふ。十二日書と駿

州高橋六郎兵衛と與へ玉ふ。廿六日高橋氏の

妻菰菜を供まじ。八月十八日駿州南條時光の請

ふ應じく本尊と書し書と併せ之を贈玉ふ。

且日與その新居を賀し。廿一日身延の記あり。

四條氏より示し玉ふ。この月南條某軍衣と供まじ。千

日女書と奉じく。謗法輕重を問ふ。九月三日御

答書有州の僧強仁とりし者書を以て宗教と

疑問し。十月廿六日書しける。是に報じて曰く。

子若疑問を決せんと欲せば。公庭にいてまじ

これを論せよ。子何を以聞せざる。十一月廿三日

奉じ教信教信の曾谷等。謬て觀心本尊鈔迹門

未得道の説あるを解して。其十四品を讀まじ

事と告ぐ。この月玄旨を一紙小書して。經一麻

呂に賜ふ。あつて傳法の信とひ。此年初心成佛



深州山
密塔寺
四面會

東書日... 一... 代... 言... 國...

像師神真筆の石塔

○法輪石とて像師高坐

に玉ひり石あり○山の

上の七面天女身延山の

七面天を同木のえ

像なり毎年九月十九日

祭礼あり

隆開寺 本能寺末 大の谷種林

直行寺 妙頭寺末 一の坂

○此寺は像師南都弘

を著し玉ふ最蓮さまに己に罪を坐し佐州

謫せらる。赦み値ふて来りすふりち廬を下

山に歸ふ。下山の甲州巨摩郡今長栄山 其地身延山に

隣に常に高祖の事へんが為あり。小堂の善智陽

よ降服せるといへども陰に猶されを悲む則ち

高祖を毒殺せんと欲し自ら来てもちを供は

高祖これを庭に投じ一狗これと食で忽ち斃

る。これに於て善智慚愧懺悔して丹誠を受戒

通小の心玉とて

此里の兵庫直行といふ

人改宗庵を結いて奉

了な後大覚大僧に再

興し直行寺と号けよ

灵地なり。祖師朗源

僧都の御作の像師隆

身の祖師の小像をもち

ごりんにせし尊像なり

○大覚大僧正の画まん



善智 謀て 高祖を 毒殺せんと 欲する 因

だらの祖師御真筆
 けのそのまごころ祖師
 の御真骨をとりて
 にせ祖師のそ像。像
 師大覚大僧三朗源僧
 都等御真筆教多
 本教寺
 一富木常師の御分骨
 ありのちんをとりて
 御真骨をとりて日親上

也。移居して朝夕敬事。日傳これあり。日傳字
 肥前阿開梨と称し中老の一あり小室村改宗
 して精舎を創し徳栄山妙法寺と号し日傳開堂也。然して
 高祖狗の為し浮圖を造る。日進法を帝都弘
 む。書を以て其事を復書してこれを誡む。
 ○同二丙子年(御年五十五)正月八日妙經要文を以
 て經一麻日口授し玉ふ。十一日一書を作り。
 かみて清澄寺の諸友小與へ玉ふ。以て台密諸
 書を借る。二月十七日松野氏諸物を供ひ。此月

人の尊像あり。祖師
 大覚大僧正の御作。妙
 見尊伊勢妙見町の
 神像をとり奉じて像
 かり
 妙覚寺末 同
 法性寺 本けと向
 一毘沙門天傳教大師
 のみん作利益あり
 本目寺末 同
 妙福寺 本せとニテ
 祖師の尊像八佐渡に

州の大井其れ供あり。富木氏の母没し。富木氏
 三づり其遺骨を齋し來り。おさめて塔を
 たつ。更し高祖を請ふて追福を修ひ。三月相州
 妙密の妻五緒を供ひ。四月十五日蒙古の使長
 州の室津に至る。十六日書と作て兵衛某と
 へ玉ふ。かひく其兄宗仲を示し。宗仲の池上右江
 士大檀のちちちちんを諫む。父怒て是
 を逐ふ。兵衛兄と志を同くし。故に諭ひ。この月

師を時刺す
 土を像を作て自ら
 開眼して師へ
 後師の像を負奉
 了赦免状をうち佐渡の
 島へ赴てよよて開運
 の祖師と稱し奉る
 小湊寺
 真福寺
 泉經寺
 〇鬼子母神大覺大僧

本尊と書して日昭日頂に授け玉ふ。六月遠藤
 信士来り訪ふ。此夏門人日合高祖に代て。総州
 野呂よゆく。直秀が淑たる所の梵字を開堂に
 直秀の曾孫谷四郎左衛門と稱し教信の子
 あり寺を建立して長崇山妙真寺と号し。高祖手書の妙
 經一本を寄せて。それを賀し玉ふ。七月十一日書
 を日昭よあつて玉ふ。廿一日報恩鈔ある。法印
 道善先よ已に迂化せるが為あり。其書の大要
 妙道の弘る必末法よある事を記し。以て自ら

正の作
 本能寺未
 本成寺
 顯正寺
 〇朝日祖師の尊像大
 覺大僧正の作。大黒
 天八傳教大師の作
 瑞光寺未
 琳聖庵
 一身延山日潮上人の父
 青木元澄その先祖百
 濟國の琳聖太子のほ

師恩を報ずるの根蒂をたはし其言よいつく。吾
 慈悲若廣大なる。宗万年の後よ逮む。廿六日
 日向日實を以て書を附し。清澄よ致さむ。蓋
 祭文に代るなり。八月十日鎌倉の妙一女山よ
 詣て。道妙信士よこれを托して。父の祈禱を請
 ふ。致書して之を許し。此月長州の人蒙古の使
 を鎌倉よ送る。九月七日官議して。蒙古の杜世
 忠等。凡九人を斬て。由井が濱に梟首し。高祖曰

貞
 正
 師
 恩
 報
 ず
 る
 の
 根
 蒂
 を
 た
 は
 し
 其
 言
 よ
 い
 つ
 く
 吾
 慈
 悲
 若
 廣
 大
 なる
 宗
 万
 年
 の
 後
 よ
 逮
 む
 廿
 六
 日
 向
 日
 實
 を
 以
 て
 書
 を
 附
 し
 清
 澄
 よ
 致
 さ
 む
 蓋
 祭
 文
 に
 代
 る
 な
 り
 八
 月
 十
 日
 鎌
 倉
 の
 妙
 一
 女
 山
 よ
 詣
 て
 道
 妙
 信
 士
 よ
 此
 を
 托
 し
 て
 父
 の
 祈
 禱
 を
 請
 ふ
 致
 書
 し
 て
 之
 を
 許
 し
 此
 月
 長
 州
 の
 人
 蒙
 古
 の
 使
 を
 鎌
 倉
 よ
 送
 る
 九
 月
 七
 日
 官
 議
 し
 て
 蒙
 古
 の
 杜
 世
 忠
 等
 凡
 九
 人
 を
 斬
 て
 由
 井
 が
 濱
 に
 梟
 首
 し
 高
 祖
 曰

だいのめ建立の地が

身延山末

墨添寺

○鬼子母神八多田満仲

公の感得の地をめぐり櫻

の旧跡あり

富士末

住本寺

法華堂

一建長のいづれ祖師御

遊学の時この地滞

留て東寺つかひまひ

く執權吾言を容び何れハ賊使を斬る十五

駿州南條九郎蹲鴟を供ふ十月一日止觀の大

意を記し以て日進を示し日進嘗て台宗の講

肆ふ就て止觀を学ぶ恐らくハ異見ハ陷る事

あらん事を故よこれを示し十月廿二日又觀

門一冊を記し十二月駿州南條平七供有此年

真言見聞を著し玉ふ宗仲来り訪ふ高祖常に

鹿食し玉ふを見て深く感ぜるところあつて

後ころから膳を減し疏食を志よくし身を終

るまであらためむ信州ハ修驗肥前とりふ者

あり其友数輩と熊野よまらで路の繚所来て

高祖ハ謁し高祖諭する小宗教を以てし肥前

大ハ嘆服は是より國よかつ時々問ひ奉つる

駿州熱原甚四郎國重来て檀越と成るすあいち

象駕を迎へつて教を受ん事を請ふ高祖ゆき

玉つべ代ハ日向を以てす日向往て宗化をとく

灵場なり元政上人も

此寺ハ法華經を習ひ

玉ふ御阿闍とて名水

あり宗祖ハ硯の水こ

安樂寺

一西寺の旧跡あり

○南寺真如院あり

同とあり法光寺あり

像師の高坐石あり

妙蓮寺

同



正正舎

源書日蓮一什言区

七十九

高祖書と送てこれを嘉し玉ふ。密徒某受戒。日春是あり。奥州新田氏の子。日奥を介と。高祖を見て給使。後得度。日目あり。阿闍梨と稱ひ父。新田五郎重綱と云ふ。

○同三丁丑年(御年五十六)二月門人日高来て曰く。我師のため。日々八役を執。一千日不満以て檀王の千歳給仕。准擬せんと請ふ。これを許せ。高祖曰く。善。相州より尼女山。詣ふ。三月二日。

一像師御自作の尊像

安置

寶相寺

一祈雨の本尊

祖師八開山天覺大僧正

の作。開山の真筆三誓

薩の石塔あり。松永貞

徳翁の丸屋の旧跡本

堂の裏の墓ありの

丸屋のしろふありの

これに托して。書と兵衛の妻に与へ玉ふ。四條氏邑を州の内船に食む。休暇毎に此ふあまを時々謁問。四月一尊四菩薩の木像を造り。高祖の點眼を請ふ。然して其說法會中に在。所の。枕儼息女皆誠信にして。威儀を具ふ。昂々然として。鶴の群雞の中。在が如し。此月好事の人。此法會を因して。四條氏に贈る。高祖神力の要。句を書して。是を贊。代玉ふ。下山の邑主兵庫。

頁書日蓮一什言区

七十九

像（い）寺（い）あり

本隆寺（い）未

最然寺（い）未

常高寺（い）未

妙覺寺（い）未

妙昌寺（い）未

満願寺（い）未

本清寺（い）未

この寺（い）水の上の

とて（い）像あり法華の

妙味（い）をきて祈れり

なる病（い）をもきくひふ

光基嘗て艸庵と造り、弥陀の像と安んず。僧と請

ふ。弥陀經を讀む。僧を因幡とす。陰は高

祖に歸り。因幡受戒して。故に唯妙經を讀む。兵庫

憚り。因幡これを諭さんと欲して高祖に謀る。

高祖こそが為。宗教一冊を著し玉ふ。六月朔

日書なる。兵庫一たび寓目して、油然として信

を發し、自ら来て受戒し、三日遠藤信士の書至

る。復書わり、鎌倉來谷れ上。僧の龍象といふ

云々

同末 福正寺 下久我村

同末 真福寺 下久我村

一宗祖のえ像、朗師の

又作かり

同末 妙法寺 同

同末 本照寺 同

同末 法華寺 同

同末 石塔寺 同

一像師題目石塔建

ものあり。龍象の巖。高座に登りて説法は甚憍慢

なり。其言ふ曰く、疑の解の信あり。試に問へ吾

答ん。衆ありて有識と云。九日、日進往て詰問す。

日進は三位。龍象終に答ふる事能はば龍象が徒

阿闍梨と稱す。龍象終に答ふる事能はば龍象が徒

日進を辱めんとし、四條氏急を走てこれを護

て去る。竜象が徒則四條氏を。其主江馬氏に請

ていさく、頼基兵を率て法會と騒乱と云く。

江馬氏 江馬氏八名越 八當時貴頭の人是を聞て

中のゆめ今諸寺小て
 十三日講中云の始め
 同末
 真經寺 同
 成願寺 木下
 三寶寺 木下
 一開山中正院日護上
 人之佛像を刻む小妙
 得玉ひ一生の中佛と
 こと玉ふと二万余等
 の諸佛みな開山の作

七面天女の現示の図



○立像の叙尊運慶
 の作。山上小妙見尊
 はまは景色甚よし
 一祖師明師像師の御
 真骨あり
 本國寺末
 常寂寺 三不
 ○當山のくち亀に似
 たれはとて亀山と名づ
 ○定家郷の旧せきま
 まの亭あり○二玉天

懼れ走らんとは蛇まると変して女とある。曰師
 親り塔中の別命を奉り末世の導師とある。我
 らまゝ佛敎を奉りて妙道と守護すならち
 持經者をして志願満足を得摩尼珠のおとく
 ならしめんと云訖て去る。これ七面大天女を
 り。垂迹の處草堂の西四十里に在浴の建仁寺
 榮西の上足宗明府の遠光寺に住し。寺の南部
 氏祖父遠光の香火寺なり。宗明因て数を高祖